Nov. 1890
No. 241

女學雜誌

明治二十三年十一月廿九日發行

第二百四十壹號

一冊六錢。毎土曜日發兌

女子修身論（松村介石）

家政の教（中島俊子）

小供の談（小島きよ）

薄命（新小説）花圃女史

風船の話（吉田のぶ）

女文學者（淸水豊子）

女學反對論（巖本善治）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 241. NOVEMBER, 29TH. 1890.

第二百四十一號目次

EDITORIAL :—An Argument of those who object to the Girl's Education.
WORDS AND DEEDS :—The Edict of the Emperor Saga. Put it into Action. It is most Happy to do Good. The two phases of Human Life.
MISCELLANEOUS :—What the girls should know in governing themselves. (Matsumura Kaiseki.) How long should we wait for the appearance of the Female Literati? (Shimidzu Toyo.) We do not Choose because we would Choose. (Fumi). A Japanese Poem. (Sudzuki Kōkio). The Spiritual Man. (Ando Taneko.)
HOUSEHOLD SCIENCE :—What the women should know. (Nakashima Toshiko.) A talk by the Hearth. (Yamashita Sekiō).
NOVEL :
CHILDREN'S COLUMN :—The Story of a peddler. (Kojima Kiyo.)
PHILOSOPHY :—Talk on Balloon. (Yoshida Nobu.)
HUMOUROUS :—
CRITICAL NOTES :—
LITERATURE :—Japanese Poems.
CONTRIBUTED ARTICLES.
NOTES AND NEWS.
CONCERNING WOMEN.

社説 言行 雜錄 家政 小説 兒籃 理學 笑草 批評 文學 隨筆 問答 寄書 時事 新誌 女報 週報 統計 物價

女學に反對するものゝ言論
嵯峨天皇の勅●實行せよ●善を爲すを尤も樂し●人世兩面
女子德を修むるの心得(松村介石)●女文學者何ぞ出ることの遅き(淸水さよ)●撰ばざるは撰ぶ所以(ふみ子)●和歌一首(鈴木弘恭)●靈の人の說(押川方義)
夫人の心得(中島さし子)●爐湯雜話(山下石翁)
薄命(田邊花圃女史)
納豆屋の話(小島きよ子)
風船の話(吉田伸子)
紅葉は存外花より紅(ふみ子)
格朗空●紅鹿の子●繪入日本家事要法●手風琴獨習の友
和歌七首●朝がほの花一時(室鳩巣)
生意氣論(中島俊子)
親の恩を知る時期(ふみ子)
愛契嚴本善治君に贈る(湯谷磋一郎)●女學雜誌の進歩を見て(鈴木弘恭)●女學記者に寄す(叢菊野史)●女學雜誌の昇榮を祝す(志氣山人)
女相撲禁止せられん事を請願す●廢娼論益熾●議長副議長●國會議員面上に泥を蒙むる●山まゆ染●勅任官の藝者●自由新聞眠らんとす●女學校花くらべ●賤業者橫行●鷄さ兎●きちがひ風

女學雜誌社出版書目

書名	著者	冊數	價
つれ〴〵草講義	鈴木弘恭大人述	一冊	價金八錢
文法口授	鈴木弘恭大人述	一冊	同十六錢
百人一首講義	鈴木弘恭大人述	一冊	同三十五錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	一冊	同十六錢
ひめ鑑	關輪正路君纂	一冊	同四十五錢
善惡之岐	中島俊子著	一冊	同卅五錢
婚姻論	横山雅男君著	一冊	同十六錢
廢娼演說	島田三郎植木枝盛兩君演說	一冊	同五錢
妓樓全廢	嚴本善治著	一冊	同五錢
公娼可滅	島田三郎、嚴本善治同著	一冊	同五錢
植物學	農學士寺尾熊三著	一冊	同五錢
昆虫植物金石採集法	林學生星野愼君	一冊	同十二錢
和書手本	明治女學校教師八木兼辰著	二冊	同五十錢
演說著作材料	女學雜誌社編輯	八冊	同四十錢
鐙子小傳	嚴本善治著	一冊	同八錢

下六番町六番地
女學雜誌社

東京廢娼運動費義捐金

二圓	安藤太郎
七圓	小島官吾
七圓	島田三郎
七圓	飯野吉三郎
二圓	湯淺二郎
七圓	嚴本善治

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

改進の廣告

女學雜誌平素の志望は今更に喋々せじ。其の何如にして生れ出で、又何如にして生ひ立ち、又々何如にして時勢の必要に應ぜしかの經歴は今又事々しく述ぶるとあるまじ。左れど、女學雜誌は、世に幾多の婦人雜誌ありて夫々の用を爲し各自の長所を發揮する時に於ては、彼等が爲し得べき限りは彼等の爲し得る儘に任せ、女學雜誌は敢て彼等が爲さゞる所ろを爲し、以て少さか女學界の欠典を補わんとせり。之が爲めに、女性に多く讀まるゝとを求めずと宣言せしともあり。又止を得ず新聞紙條例の下に立つて多少政論を試みんと布告したるともあり。女學雜誌が希ふ所ろは、婦人雜誌の万能膏たらんとを欲するにあらずして、其仲間のうちの尤とも爲し難き、需めの尤も狹き、隨て寶高の至て少なき部分を望みて敢為豪任せんとを欲するにてありき。一言するに、願わくは婦人雜誌中の改革者、即はち一方に於ける惡まれ者、又婦人雜誌中の先導者、即はち或意味に於ての孤立者とならんとを覺悟せしにあり。

此精神と覺悟とは今倘ほ勃々たり。恐らくは永遠に斯の如くあらんとを期望す。左れど、今や他の幾多の婦人雜誌落々として追々に失せ行き、僅かに殘る所ろの三種は、一は佛教を講ずるのみ、一は文章を掲ぐる耳、一は雜駁に只集むる耳なるとを思ふに於ては、女學雜誌は今や亦た更に一つの責任を負はざるを得ず。加ふるに女學生の半途にて學を休めしものも多く、又新たに女學の必要を說き聞かせねば成らぬ向も多くなれり。

要するに女學雜誌は其一半を割きて其二三年以前の昔しに立反り、即はち嘗て他の婦人雜誌なかりし時の昔し、又嘗て諄々として女學の必要を講述せし時の昔しに反へりて、平易に、且つ手廣に、四方に叫び聞こゆる所なかる可らざるの時節と爲りぬ。故に、女學雜誌は、此際更に一段の改進を爲し、大率ね左の如き條々に於て大ひに變革する所ろあらん。

一　文字を平易にし、事柄を實際にし、尋常の婦人、及び女學に心得なき者にても、能く分るやうに諄々懇ろに說明する事。

二　故に女性の記者八名を新に聘し、家政、其他婦女子百般の心得を實際に說明する事。

三　左れど女學雜誌從前の躰裁を減失し去らんとを恐れ、每月一回本紙半分の大附錄を添へ、大問題に對し大議論を爲すべし。

四　故に、平易及び實際となれる每週の女學雜誌に、此の月一回の大附錄を併せ覽れば、從來女學雜誌の面目は一層煥發すると同時に、實用快樂の記事饒多に增加したるとを覺ゆべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌改進大畧

皇帝陛下第一帝國議會を開かせ玉ひ、日本の國勢將に一開變せんとするの初期日たる、十一月廿九日發行の女學雜誌第二百四十一號より、著じるしき改進を爲しぬ。面目新らしく變はり、光彩一きは目立ちたることと自信す。

即はち、欄を、社說、言行、雜錄（集會談話の速記、訪問の記錄、反譯、其他樣々の項目を含む）、家政、小說、兒童、批評、文學、理學、笑草、問答、寄書、隨感、時事、新誌、女報、週報、物價、統計、紹介、の二十欄に分ち、從來掲載したる項目の外に、實際の家政經濟取締の件、細君及母親の心得となる覺悟、佳人英雄善者義人などの言行、文學理學などの俗解、物のねだん、病人の取扱方、一切の女の心得向などを、尤も平易に且つ尤も面白く講述せんとす。

之が爲めに、從前の社員の外に、更に女記者八氏を聘し、各得意の欄に應じて秀妙有益の執筆を請ふべし。中島俊子女史は警拔俊秀の靈文を以て、時事問題を評し、且つ寸鐵殺人の短詩を以て同胞に警告する所あらんとす。若松しづ、田邊花圃の兩女史は、其純潔なる思想又は其才慧なる運筆を以て、各自特得の小說を起草せんとす。女子師範校の卒業生たり、日本女醫の破天光たる荻野吟女史は、衛生、看病の項目を懇ろに講話あらんとす。同じく女子師範校著名の卒業生よりして多年理化學を研究し且つ長年之を教授ありける吉田伸子女史は、理學を平易に又樂しみ多く解釋せられんとす。明治女學校速記科第一回卒業生安藤たね子は、四方の有益なる講談會に臨みて、有益なる談話を筆記し、讀者をして坐ながら、諸大家の談話を聽聞せしめんとす。又た、家政學を學術的に講究し、我國に順序立ちたる家政學を創起せんことに熱心し、現に之を研窮し亦常に之を教授せらるゝ所ろの小島きよ女史に請ふて、家政及び兒童に信仰あつき最と潔ぎよき說話を掲げんことを欲す。而して、淸水豐女史は、專ぱら、主筆、編輯の任に當り、全躰の責めを負はんとす。但し、巖本善治が女學雜誌に關係する所ろ敢て今日迄と異なることなし。

女學雜誌は、今后如此く、平易に且つ面白くなるべし、左れば、從來不背の意見を棄てずして其改革主義の慷慨論あることに愛顧せられたる讀者諸君は、如此き改進を以て或は不滿足と爲し玉ふこともあるべし。吾人も亦之を慊む。故に、月一回の大附錄を添へ、之に於て愚見を十分に吐露し、女學雜誌相應の大議論を公けにすべし。以后女學雜誌は、始んど完備したる「家の雜誌」西洋所云るホーム、ジヨウナルとなるべし。而して女學雜誌が愚任したる社會改良的の慷慨意見は、其間に輝々として輝やき、每月一回の附錄に於て更に大煥發することあらんとす。其他一層細密なる躰姿何如あらんかは、第二百四十一號以后の雜誌紙面を見て希くは惠評せよ。

要目

女學雜誌　淸水豐子編輯
右每週各土曜日早朝全國に配布

附錄女學　磯貝雲峯編輯
右每月第一土曜日女學雜誌附錄

女學雜誌定價元の如し
一冊六錢、郵稅五厘、府內郵稅なし
十冊前金郵稅共六十三錢

附錄女學定價なし無代
但し直得意前金拂の讀者にのみ呈す

女學雜誌、通信女學、女學生、發行所
東京下六番町六番地
女學雜誌社
女學書類出版所、同じく取次所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百四十一號 明治二十三年十一月廿九日發兌

社説

女學に反對する者の言論

俗に「弱い者いじめ」と云ふことあり、至つて卑劣にして丈夫烈婦の得て爲すまじき所ろの者也。近來、女子敎育の事に關して彼此と論ろふ者尠なからず、言ふ所ろ悉とく愚かにてはなけれど、必竟「弱い者いじめ」の所爲に過ぎず。吾人今ま其由縁を説明して、暴りに俗論に加擔する人の歩みを制めん。』

或人の云はく、女學校の學課は、日に三時間に越えざるを要す、苟くも之より過れば、衞生上の害懼るべきものあらんと。成程最と心地よきの勉學と云はゞ日に三時間がほどなるべしたとへば春秋の如く、烈しく暑くもなく、極めて寒くもなく、身躰に適し與とに好き加減と云ふべし。然はあれど、年中つねに春秋あらざるが如く、勉學の度合いつも心地よきほどに存することを得ざる所以のものは、最初學に就くの年齡思ひしよりも遅きの事あるか、もしくは、后ち婚嫁するの時節切迫するの譯あるか、中ごろたゞうか／＼と學問のみ致し難きの事情あるか、何れにせよ、さま／＼の事柄ありて、扨ては日に／＼ゆる／＼として長年月を氣長に學問すること能はず、此を以て或る時は日に四五時間の稽古を爲し、又或時は六七時間の長きに渉ることあり、斯る融通を以て、他の不足を辨じ、漸やくにして一と通りの學問を了ることもあらん。蓋し人はたゞ衞生上の故をもて生るに非ず、更に他の幾多の關はる所あるを以て、此等多くの關係する所を一々斟酌して、前后左右の權衡を能く計らざるを得ず、此に於てか、醫學上の理想を直ちに實行して、万事をたゞ其理想中に沒すること能ざるものある也。夫れ數多ある學校のうち、金多く人足れるは帝國大學に超るものあらざるべし、而して大學のうち尤も切に衞生に注意するものは必ずや醫科大學あらずんばあらず。然るに吾人が見聞する所によれば、凡そ勉學上不養生を極むることの多き、醫科大學の如きは殆ど稀也と思はる、特に卒業の間際とあれば、朝た早くより夜晩く迄立つゞけに學科を押込み、午飯を立ち乍らに喫せしむるなどの忙はしさも又往々にしてこれありと聞ゆ。是れ醫科大學が衞生上の通理を知らざるにはあらず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

知るも尙ほ之を實際に行ひがたき所以のものは、衛生上の事柄の外に、他に更に幾多の關係する所ろあればなるべし。醫科大學敎授ベルッ氏云く、日に三時間以上敎ゆる女學校は尤も危險なりと。左れど、如此き事はたゞ女學校にのみ責むべきものに非ず。

又或人の云へらく、今の女學校の卒業生は、役に立たず、チルガンに堪能なりとも用ゆるに足らず、英語に巧みなりとも談ずるの用なし、數年を女學校辛苦の學窓に費やさしむとも後に殆んど用ゆる所ろあらずと。是れ押なべて聞く所ろの不平也。此の不平の起る所ろを極めて公平に判斷するに、從來の女子敎育が多少其方針を誤まり居たると亦爭ふ可らず、而して其誤まりの大元因は不幸にして宣敎師派の女學校に歸する所ろなくんばあらず、之れ言ひ消すとを得ざる所ろの事實也。左れど、女學校の卒業生を見て一概に「役に立たず」の總評し、其學窓に於て學びたる學科一々直接に用ひらるゝとなくんば、則ち學問の效能なしと云ふに至つては、獨り女子敎育にのみ重きを要めて、所謂る弱きを痛むるの精神に外ならずとなす。政府莫大の金を費して高等中學を設け、其上に亦大學を置けり。扨て高等中學に於て學ぶ所のものは悉とく大學入門の爲めに必要ありやと云はゞ必らずしも然らず、今の高等中學は、大學の爲にも亦た今の日本の爲にも、殆んど直接の効あらざるほど完全且つ該博なる高等の普通學を敎ゆ、率直に之を評すれば文部省の主旨此處に於て一二世紀后の完人物を製造しつゝあるが如し。然れど、假りに先づ之を大學の爲に必要なる階梯と爲さんに、大學の卒業生は今日の日本に直接の用を爲し、皆な所云る實地の役に立つ所のものなりや何如んと問ざる可らず。然るに前後十數年の苦學を積て、政治學を卒業し、其政治學は日本現政治の爲に何の役をも爲さなし、又同じき程の苦學を積て法學を卒業し、其法學は三四十圓の官員となりて無學有經驗の法官の下に驅使せらるゝの便たるに過ぎず。若し「役に立つ」と云へる一句を普通の解釋にて辨ぜんには、大學多年の敎育は即はち役に立ぬ所ろの卒業生を竹の子の如くに生ひ育つるものと云つべし。左れど吾人は決して之を役に立たずとは云ふとなけん、何んとなれば、之れ役に立たざるにあらず、未まだ役に立つほどの地位に用ひられざるがゆゑ也。又實地直接に役に立たざるとも、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

腦力の上に於て其人の人物を高くし、一生万端の事務を處するに於て大方ならぬ裨補を爲すべし、之れ其學問が不知不識の間だに於て役に立つ所以なりとこそ辨ずべけれ。果して然らば、女學生の事亦同筆法を以て解釋せざる可らず。夫れ今の女學生は未だ其器量を役に立つるほどの地位に置かれざる也、娘子五年の勉學によりて非常に立まさりたる秀才となりぬ、左れど父母の地位依然として元の如くなるを以て、亦た其地位相應の家に娘子を嫁せしむ、其狀五級以上の優物を亦五級以下に引下げて昔しに立反らしめ、大海の鯨魚を池中に埋めて汝ぢ何んぞ大ひに跳らざると云ふに均し。如此くして役に立ぬと目し、之を敎育の効なきものとせば、敎育なるものは長しへに無効なるべし。又た、女學生普通の家に嫁し、尋常の取まわしに於ては左して無敎育の女に異なるとなく、或ひは時として之に劣るとあらんと云へども、之によりて直ちに其敎育を役に立ざりしと判定するとなかれ、たとへば良藥を服したる如く、左程明らかに目に立ずと云へども、久しうして効驗を發し、無論尋常の俗婦人に異ると万々なるを知らん。本因坊一面の碁盤に石を打てば優劣なし、四面を合せて之を試むれば器量大ひに優りたりと云へり、變に臨み非常に際して尤物の資格初めて現わる、此に至らずして女學生を無敎育の女輩に比較し、平時英雄を市人に較べて、彼れ小器用ならず、役に立たずと云はんと、豈に眞人を見るの論評あらんや。

但し吾人は此理わりを強く辨ぜんとする者にあらず、但だ男學生の敎育に付ては必らずしも直ちに役に立つとを要めず、獨り女學生の敎育に付ては直ちに實際の効能を目に見るが如く明らかに示せと云ひ、然るとなくんば之れ敎育の無効なりし也と云ふもの夥たゞしきを見、論者が何如にも弱きをのみ痛むるの卑劣なるを嘲けらずんばあらずとは云ふ。

吾人は今の女子敎育法に就きて、多少の異論を有す。其の改革せざる可らざるもの、及び大よ增減せざる可らざるもの、甚はだ少なからざるを知る。亦た近時浮立ちたる女子敎育大に沈滯し、表面上著じるしく女子敎育の衰退したるが如きに付きては、一二の辨ずる所ろなかる可らざるを知る。然れども、有ふれたる反對論が切りに女子敎育に向ふて蟷螂の斧を揮ひ、大率ね前述したる類ひの異論を擧て之に逆らわんとするに至つては、大ひに感服すると能わず、故に先づ之を辨じ置くと云ふ。

言行

しのぶ

○嵯峨天皇の勅に云く、朕より后の人の主に示すなり、國土の邪氣の者を罪せんより、万民の貧しき事をはからひて、苦しみを救へ、惡人消失せなん、諸人の惡きふるまいを爲すは、汎ねく今日を送りかねたるより、起るなり、國家に惡人たる源なし、たゞ天地の養なひを知らで、空しく世渡るに有るものなり、愚かに賤しきものゝ直き心なきは理わりあり、直かるべき人主の直からぬゆへなるべし。

天皇は神聖にして犯す可らず、かゝる勅を聞くは恐ろしき限りあり、民の爲めに國會に出で、上に立ちて法律の事を議する人々は則はち此を以て心とすべし。

○實行せよ　チヤーレス、キングスレー曰く、尊重すべき事を實行せよ、只だ之を夢想する勿れ、生命と、死と、永遠とを、一つの大ひなる善き歌と爲せよ。

○貧賤の王　ロバート、ボルンズ曰く、正直なる人は、身たとひ貧賤なりと云へども、その正直なるとによりて、人の王となる。

善を爲すと尤も樂し

われ世の中を見るに、善を爲すものは、金にあらず、又智慧にあらず。依然として善なり。麥の生ひ立ちを助くる者は肥料又は雨露なるべし、左れど麥の眞の種は矢張り麥ならずんばあらず。如此く善の元は必らずや善のみ。スマイルス曰く、パウロ及び其徒弟が、廣き羅馬帝國に道を傳へたる事業は、著しきものあり、左れど其入費はバザール(慈善會)の上り高の半ばにも過ぎずと。

ナイテンゲールは何をもて働らきしや、彼女を動かせし刺激は何ものにてありつる乎。家富みて些の不自由もなく、才はじけ、學人並に越え、容色また拔群あり、世の持はやし一と方ならず。現世の望み足れりと謂つべし。然るに、身を孤船に托して大海原を横ぎり、炮丸なり轟ろき、鮮血川の如く流れ、殺氣天に滿ちて骨累々たるクリミヤの戰場に到り、濃を吸ひ、傷を洗ひ、包帶をまとひ、痛める者を慰さめ、苦しめる者を醫やし、夜色沈々、滿堂の手負ひ、夢に苦吟して故郷の妻子を叫ぶのとき、燈を携さへて巡視し、曉に徹する迄で之を看護したる眞實は何處より來れる乎。智者は云はく、藥を

發明すべし、病直ちに醫えんと。富めるものは云はく、黄金の力、万事を爲すべしと。左れど、彼等は人の胸奥の苦痛を慰さむるに足らず。あゝ十万の兵、魯士亞の猛卒にすら一歩を引かず、砂を蹴立てゝ戰はんとを欲す。然れども一歩女子が恩愛の情けに對しては、之を崇拜するの外なし。大丈夫は何ものにも屈せず、たゞ愛と情けとに服す。

智識は學校に於て得べし、金は儉約によりて蓄はふべし、但だ愛情は、自から養はずんば得るとかたし。同胞よ、天地の惠み幾千ぞ、其心のねぎ言たゆるとなし。汝等自づからの情けを發揮して能く人をあはれむべし、人の爲めに身を捐つるは則はち道に於て生くる也、善を行つて一生を送る、靈に於て樂しきと何ものか之に及かん。

○人世兩面

ブルエル、リツトン曰く、若し、貸さんとを欲し、與へんとを欲し、遺らんとを欲すれば、世は黄金の世界なり。若し、請はんとを欲し、借らんとを欲し、人の物を得んとを欲せば、世は實に地獄の世界なり。

雜録

女子德を脩むるの心得

松村介石

人の德を修むに於て男女の別ちあるべきなし。されば殊更に女子修德と申すとも。そはたゞ女子について云ふがゆえのみ。其主義に至りては男子も亦た同じく我が此說中にありと知るべし。

思ふに修德上。人に四種類の別あるべし。第一は修德を好まぬ人。第二は修德に意を留めぬ人。第三は修德を力むる人。第四は修德を樂しむ人。即是なり。

修德を好まぬ人　（第一種）

世に此の類ほど怖ろしく。又忌はしきものはなかるべし。かの肚の黑き陰險の人。此中に在り。邪智奸獰の人。此中に在り。而して諂佞僞善の徒。亦た此中に含蓄す。記者は今之を發き出して。敢て諸姉妹に示さんと欲す。蓋し快よからず思ふと雖ども。修身上の心得の爲め。亦た止むを得ざるにこそ。

されば此種の人物は抑々如何なるものぞと申すに。先づ其外貌は極めて優しく。禮法至て端しきを例とす。試みに此種の人物に接してみ玉へ。項斜に。おちよぼ口。腰折りかゞめてしとやかに。辨舌流麗。挨拶最も鄭重なり(但し女生の方を云ふ。又僞善の部を云ふ。彼の眞に謙讓より起るものは。第三第四種の中に在り。讀者請ふ辨識を謬る勿れ)。是に於てか。人一見して驚いて惟ふ。こは天使にはあらざるか。抑々理想的婦人とは。かゝる類をこそ謂ふならめと。然れども熟々就て内心を覩て。よく／＼眞底を叩き出せば。こはこれ眞赤の僞善にして。所謂る羊の姿にて來る。殘虐き狼の類なるを知らん。彼等は笑ふて言ふ。然れども笑ふが中にも劍を匿くせり。彼等は俯して敬拜す。然れども俯しつゝ侮りて。舌を吐きける。其挨拶の鄭寧なるは。即ち人を欺かんが爲め。其容態のしとやかなるは。即ち求むるところあればなり。宛も大蛇の臥し居る鹿を屠らんとし。靜かに籔叢より來るが如く。獵夫が樹にとまる鳥を擊んとて。首を縮かめ。腰折りかゞめて近づき寄るに異ならず。人或は諂られて則ち惟ふ。彼等は誠に深愛の人。無二の親友。我一生の力なりと。然れども彼等は我利我意一遍の人たるのみ。決して人の爲め。友の爲めなんどを思ひ量るものにはあらず。其の或は之れあるが如くにみゆるゆゑんのものは。即ち彼等が幻術のみ。よく心して彼等を見玉へ。彼等は絕へて。己れより優れるもの。若くは神智あるものを友とせず。其友とするところ。多くは少女若くは鈍女の類とす。少女鈍女は乃ち惟ふ。世には彼等ほど親切にして愛ある人はあるまじと。而して之に信隨す。然れどもこれは是れ彼等が己が私情を喜ばしめ。己が意望を達せんが爲めの親友のみ。彼等が少女を愛するは。玩弄物として愛するなり。鈍女に優しきゆゑんのものは。騙愉して以て己が機械に供せんが爲めのみ。サレバ試みに此の少女をして少しく彼等に悖らしめよや。忽ち怒て鞭たん。鈍女をして少しく顧使に背かしめよや。怖ろしき復讐忽ち來らん。彼等は何が故に己れより優るものを友とせざるか。曰く。彼等は嫉妬の念に滿つ。是の故に其の己れより優れるものを見るときには。嫉んで之を陷れんとこそはすれ。友とし親むとはせざるなり。何が故に神智あるものを友とせざるが。曰くわが僞善を看破せられて。赤耻かゝされんとを恐れてなり。彼等は又決して國家の爲め同胞の爲めなんどを慮かるものにはあらず。然れども彼等は名譽を貪ぼるが故に。敢て猥りに公言して。

國家社會の爲めに盡くすと云ふ。即はち嬌風の如き、慈善の如き、政治の如き、教育の如き。凡そ人の目に立つところには、好んで出で、働らかんとす。(又た誤解する勿かれ、此には唯だ僞善の部を云ふ。彼の眞正の憂國愛人の烈女の如きは即はち第三四種の中に在り)。彼等には才子多し、此故に巧くみに文を雜誌に弄し、滔々と辨を集會に振るひ、四方を睥睨して立たんとす。知らぬものは感嘆して、天晴無双の烈女哉。東洋のウイラルド、今世のエリサベス、フライ。此君生命永かれよと申す、(又辨識を要す)。然れども其の能く心術を知るところのものは、聞いて佇視して竊そかに哂らふ。何となれば、彼等は慈善矯風を餌食として、己が名譽を釣らんとするものなるを知ればなり。加之彼等は凡べて此等の事業に當たるに於ても、常に我意をのみ轍さんことを是れ勉とめ、己が説をのみ人に行なはさんことを是れ要とめ。萬一其の意に悖とるものあるか、但しは其の説の行なはれざるときには。則はち其の悖とるものを除ぞかんことを是れ企だて、其の説を行なはざる仲間の事業を妨たげんことを是れ謀かる。何となれば彼等は常に己より優されるものを忌み嫉くみ、之れを落して以て自から昇ぼらんことを忘れざるものあればなり。

サレバ今試みに彼等に向つて他人の善美を稱揚しみるべし。彼等は愚物ならぬを以て、暫くは忍びて之に應じ。如何にも某は文章に長たれ、如何にも某は人品高尚なれ、如何にも感心の人にて候へ、如何にも仰せの如くにこそあれ、なんど、我が言ふまに〳〵應ふべし。然れども其は只だ一時の挨拶にすぎず。心の中には、嫉さ切齒さ、終には惡念を制しかね。漸く口吻を轉じ來りて、結局は其人を譏傷し去らん。是れ彼等が常慣なり。

（未完）

女文學者何ぞ出ることの遲きや

淸水豊子

日本古來女文學者實に尠なし、妾が知る所を以てせば、纔に指を紫式部、淸少納言、外四五の宮姫に屈すべきのみ、近世に至りては殊に寥々、明治の今日に至るも、猶且未だ女文學者なるものを見ず、否會々之有りと雖も、其聲の殊に小さく、其數の甚だ尠きを、訝らずんばあらざるなり、妾は思ふ日本の今日、實際には女文學者と稱すべきものなき筈なし、只其女文學者として名乘出る人なきが爲めに、吾人ともに之れを認むることを得ざるあらむ。

昔の日本に、女文學者なかりしは、當然の事なり、婦女は學問をなす可からずといひ、又學問を爲すは、却つて身を損なうの基なりと云ひ、成るべく文字を知らざらしめたり、是に

於てか其天然の才あるものも、之れを發達するの道なかりしあり、況んや其他をや、去れど明治の今日となりては、十餘年來既に女子教育の途開け、普通教育の外に多少文學上の教育を施し來りし事なれば、實際に就て京濱間の女學校を觀察すれば、實にをさ〳〵大學の學生にも、劣らざる程の修業を積みたる女性頗ぶる多きを觀る、然るに此等の人は、今將た何事を爲し居るか、閴として音なく、寂として聲なし、妾は其姉妹の何故に、多年書籍と共に生息し、書籍と共に起臥しながら、幾多の學問を其身に貯へたる儘、社會の裏面に、潜まるゝかを疑ふなり。

月は水を得て愈明らかに、花は柳を添へて愈紅なり、我文界婦人の生氣を添へなば、更に幾多の趣味を生ずべし、而して、乾燥したる分子は、之れが爲に潤ほされ、濁れる個所は、之れが爲に淸めらるべし。然るに諸姉をして今日まで、躊躇逡巡せしめたるものは何ぞや、蓋し幾多の原因ありて存するならむとは云へど、大要知りしことをも知らずといひ、爲し得べき事をも爲し能はずと云ひ、只だ猶豫ふをもて婦人の美德と心得たる舊習未だ脫せず、又單に書籍上の文字をのみ讀むも、活世界の活物を讀むの思想なかりしなどの故に因らずんばあらざるなり。

去れば妾が今諸姉に向つて所む所は此上其書籍上の見聞を博むることに非ずして、活世界の活物を活讀し玉へといふにあり、徒に理想上の文學者をのみ念慮とせずして、實際今日の日本に要する文學上の働らきをなし玉へといふにあり。夫れ言ふ可き時に言はず、起つべき時に起たざるは、決して温柔しきに非ず、謹み深きにも非ず、其は實に、臆病怯懦の人たるなり、妾は諸姉が謙退と怯懦とを混淆して、可惜寶を持ちながら、空敷腐朽に歸し去られむかを氣遣ひ、必らずしも隣家の寶を羨むことにはあらねど、洵に之れを惜しむ可き事と思ふなり。

妾は素と學識に長ぜず、未だ諸姉に向つて是等の事を勸告し此等の事を促すの、價値あるものに非ず、去れど我女界文學者出でず、我文界女性なきことは、我等女性たるものをして、甚遺憾ならしむることとなるのみならず、明治の文學をして、自然乾燥無味に歸せしめ而して純潔優美の趣味を欠くの一原因たらずんば非ることを思へば、妾は其己れの身の、毫も文學上に喙を容るべきものに非ることをも忘れて、只管ら諸姉の爲に、懇請せざるを得ぬこととなりぬ。今代の紫女何處に潜める、明治の納言何處にある、妾は切に君を待つ、妾は切に君を待つ、否妾よりも社會は稻且夙に、君を待ちつゝ居るならむ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

撰ばざるは撰ぶ所以

ふみ子

「梅やお前ももう當年はとッて廿二歳いつ迄も子供の樣には思ふて居るものゝ、昔ならば人が片輪か氣儘者かと惡評を入るゝ程、嫁入には後れた年、もう能い加減に嫁入したが宜ろふ、一躰お前はどういふ處がよいの、今迄幾度勸めても、いつも嫌だ〳〵と計りいふて居るが、もう今度はそうはいはさぬつもり、第一お親父さんも御安心あさらんし、私も肩の荷がおりぬ樣です。ダガ決していやな處へ無理にとはいはぬ、只お前のこれならば行こふといふ處をさへ聞ておけば夫れで宜しい。全躰お前は、何が好きなの、學者か、官員か、商法家か、但しは銀行や會社の役員の樣な人がよいの、構はないから、イッて御覽聞いてさへおけば、又心得になるから、ヨ、ヨウ。

と熱心に問いかくる五十一二の老婆さん。梅子といふは、多分此人の末ッ子なるべし、前刻よりの談話を、ニヤリ〳〵と笑ひながら聞き居たるが漸く口を開き、

「アラおつかさん、何をおつしやるかと思つたら、又お嫁入りのおはなしですか。何も、私は、一生お嫁入りを致さないとは申上ませんけれ共、相等な人がある迄は、どうぞ此儘にして置て戴きたいのです。

「ダカラサ、今々に、何處へ行きなさいとはイッテいないじやないか、只私の心得迄に、お前の腹を聞ておくのダヨ。

「それじやア申上升がね、私は、職人でも、人力車夫でも、何でも構いませんのです。只正當に私を愛して呉れる人で眞面目に人間の本分を竭す人でさへあれば、宜しいのです。

老婆は呆然、しばし娘の顏を見詰め居たりしが、やがて少しく唇を顫はせながら、曇り聲にて、

「ほんとにお前は困るヨ、如何に私がお嫁入りを勸めたからッて何もそんなにダヽをコチる事はないじやないか。お前の爲惡しかれとて勸める事じやあるまいし、イクラ何んだつて、人力車夫や、職人の處へ遣ろふッて、爰迄學問したり何かして、立派に育だてはしないヨ。お親父さんがお聞きなすつたら、いくら御立腹なさるか知れないヨ、馬鹿ゝゝしい、ほんとに、今の娘は……、親を馬鹿にするにも程が有ますッ。

娘は僅一二言したる景色なりしが、母親が重ねて、

「モウ〳〵宜しいッ。聞かなくても宜しいッよ。どうせ、私の

いふ事は茶にして、お聞きでないからお父さんに申上て、お父さんから仰しやつて戴こふよ。

と言放ちたる切り、取合はねば、娘はやがてしほ／＼と立上り、障子の外に出で、椽側に立ちながら、獨り言。

「あゝほんとにおかつさんには困るわ。勿躰ない事だけれ共、お分りなさらないから、いつもお嫁入りばなしがでると直に資産がどうだの、身分が何だのと、身分や財産と結婚でもするか何ぞの樣におつしやるには、實に困るよ。コウいふ樣な人物がと申上た處で、どふせお分りになりはしず。ダカラ、イツモ、人力車夫でも何でもといつて、撰擧區を廣くして置く迄の事、スルトちきア、おつしやつて、御立腹なさるんだもの、實に仕方がないじやないか。私が撰ばぬといふのは、大に撰ぶ所ろなのだけれ共………………

是は、私が、此頃ある所にて親しく見聞したるはなしなるが、成程撰ばざるは撰ぶ所以とは、實に尤もなる立派ある考へです。但其云ひ方が、長者に對する言葉としては、少しく穩ならぬ樣に聞へ升。兎角今の若き人達の語氣は、こういふ風ですから、アッタラ名論も、人に聞入られぬ樣になり升。是は隨分注意せねばならぬ事です。

國會

鈴木弘恭

今の世にまねぶとはなりに鳥
かみのはかりし神はかりこと

靈の人の說

安藤たれ子　筆記

押川方義君、說敎のうちに云はく、

靈の人とは、クリストの如き人と云ふとで、クリストの如くなるとは、世から離れるのでなく、世に行われるのである。商賣もし、事業もし、學問もし、政治もするとであるが、然し其の商賣、事業、學問、政治に一身を埋めるのでなく、更に大ひなる目的を以て此等の務を盡すものである。一例を擧れば、聖書を讀んで、天は神の榮光を顯はすといふ句があるとき、初めは此言語を尊とんだ、然し次には之を言ふたダビデの心の中に這入つて其心持を學ぶ、最后には自から天を敬まふやうになる。如此く、惣べて一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる靈の心得を以てする人が即はち靈の人である。仕事に拘つらはず、習慣に拘つらはず、肉に拘つらはず、心の靈の爲に尤とも考へ、心の靈の爲に尤とも盡力する人が即はち靈の人である………

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

夫人の心得（一）

中島俊子

左に揭ぐるは、編者が家の妹かめ子、先頃ろ理學士木村駿吉君の許に歸げるとき、中島俊子夫人が書きて與へ玉ひしものゝ寫しなり。價ひある寶を一人藏めんは空恐ろしと、妹が言ふまゝ、玆に揭ぐるとなりぬ。內事を露はすとして笑はず、志ざす所ろを味ひ玉へと云ふ。編者。

生計

一か月得るの多少を量り、その中の幾分を非常費に存し置き、他を三十日に割て、一日幾程に相當するかを算し、それにて生計の度を定むべし。厘毛の數と雖も、帳簿に記すべし。入金の多からざるを愁ふなかれ、唯經濟のたくみならざるを愁ふべし。

家の飾り

家のかざりは、その家〳〵のこのみあれば、他人のかくせよといふべきには非ず。されど近ごろ女學校より出しものは、單に西洋風を模し、皿を置たり、扇を揭けたり、糸細工の上に澤山人形を連ねたり、宛もおもちやか、勸工場に入りし心地して、甚雅致少く感ぜしが、他人は如何ならん。

人の來りしとき

ひとの來りしときは、長く待さぬこそよけれ。朝起くれは、直ちに坐しきを洒掃し、衣髮をとゝのへ、何時來人あるも、差支なきを要す。來人に對してこゝろになき追從は聞にくし。今日は用事あるに早く歸れかしと思ふ顏色を顯はさんより、明ら樣にかく〳〵の用事あれはと、斷る方こそ味多けれ。

料理

料理は、可成他よりとるべからず。一兩日保存すべきものを、常に貯置きて、不意の用に供するをよしとす。毎日同じものを作るなかれ。またおのがこのみのものゝみをつくるべからず。美食を作るを要するなかれ。鹽梅のよきと、うつはの淸きとを期せよ。

婢僕を使ふには

必ず順序を立て命ずべし。以前の用終らざるに、更に他を命ずべからず。事を命ずる、言葉少くして、明かなるを要す。命令と、談話と、混交するなかれ。無益の談話を爲すときは、婢僕馴れ易し、馴るゝときは命行はれず、命行はれざれば、家整はざるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爐邊雜話

山下石翁

…そうね、別に面白いお談しはありませんが、アナタ方が後日、家をお持ちなさる時の心得を少しづゝ申ましやう。私しは男ですから氣の注かん所ろも多いでしやうが、先づ年の功で、久しい間の經驗ばなしてすよ。と薪をくべ……

客に物をすゝめる時

モ少し、お食りなさいよ、チー、モ少し、まだ澤山あるんですから、餘るんですから、チ、モ少し食べて頂戴、腐くなッチまうんですから。

かやうに言ふて客に奨める人があります、實に無禮の言分です。澤山あるから食べろとは、何如にも客を見下げた談で、況んや、食べて下さらねば、腐るとは何んたるとてもやう、客の腹を掃溜同様に思ふて、棄てる代りにお腹の中へ入れて下さい、勿躰ないから食べて下さいと言ふやうなもの、かくも心得のない饗應はありません。然るに立派な奥さまでも、つい〳〵知らずに斯様の事を言ふものです。

冷めますから

旦那さま、モウつぎましたよ、冷めますから、早くお食んなさい。

かやうな催促を受る時は、私はいつもムットして癪にさへたとが毎度あります。私は大切な用事を仕て居て手が離されぬのです。其用事と汁の冷めると何ちらが大切かと言ふとも考へず、たゞ一圖に早くお食んなさいと催促する、其催促のうちには、早く方付けたいと云ふ心持が見て居る。夫のみか、片付ませんから早くお食んなさいなどゝ云ふものすらあります。實に主人に對して失敬な申條です。失敬なるのみならず、コチラは夫で食べる氣が無くなつて、切角の御馳走も味が失せて仕舞ます。

これ源吉手前にもう年は三十の上になるではないかそれだのにまだ親を養ふことが出來ぬとは情ないではないか……源吉は平氣で親父さんはもう六十の上にもなつて居るに息子一人食はせることが出來ぬとは情ないではないか。

源吉或る日人に向て己れは生れてから死ぬ迄勞がずに食ふことを知て居るぜ……ダウダと知れキッチ居ら先づ三十迄親父の世話になつて三十から死ぬ迄は子供の世話になるノサ。

一寸と貴孃の御父様は御足が一本だと聞きましたが本とうですか……軍人の娘は答て……エー一本しかないノ……デハ一本の足は何處へ行きましたノ……左様天國へ上りましたでしよう。

小說

薄命

田邊花圃女史

お孃樣などはそうして學問を遊ばして入らつしやつても、まだ〳〵いろんなお不足を仰しやい升が、人と申者は、とゞのつまり迄參りますと、慾も德もいらなくなるものでムり升。マア私しの身の上をお聞遊したら、親御樣のお大事な事も分り、お不滿のお心も解けませう。私しの父は舊幕の頃は布衣以上の役でムりましたが、お時勢につれ、家も段々衰微して參りました處へ、父は開國家で、早く蘭學などを習ひましたものですから、その頃の事とて、誰れともしれず父の臥床へ忍び入、暗殺を致し升した。なんでも樣子をしつたものにちがひないと、穿索を致し升うちに、御維新の騷動。私しは未だ三ッ子、母は愁に愁を取重ね、他に便る人もありませんから、乳母と呼老婆一人連て、出入の町人が橫濱に居り升から、これへにげました。この町人は、始終宅へ出入をして、役者の樣だといはれた男でしたが、まだ獨身でしたものでムり升から、いつか母と夫婦同樣になり、私しも片言ながら父とよぶやうに成升た。この男は母より六ッ斗年下でしたから、母も若作りに致して、近邊で評判の美人だつたといふ事でムり升。父は糶呉服商ですが、豐でもなく、貧でもなく、過し升うち、母はブラ〳〵と煩ひつきまして、遂になくなりました。この日の夕方、乳母にひそ〳〵とはなすを聞升と、何か色々後悔をした樣子で、實にこゝへおくと、美代は何をされるかしれないから、早く旦那と手を切らせたいとか、なんとか、よくは分りません、まだ八ッでムりましたから。なんでもこの咄しを聞た時、ゾッとして實にこわい家だ、なんだかこわい父だと、フッとおもいました。其晩に、母はいつか一重の胡坐の上へ寢かされましたから、カアちやん、さむいよと申て、側の蒲團を引ずつて參り、かけやうとしましたを、父はそんな事をするもんじやアないと、叱つて引手繰ました。この時に、ア、こわいおとつさんだ、何をされるかしれないとおもつて、悲しうムい升た。それから、母を箱の中へ入て、釘を打つたのも父ですから、いよ〳〵おそろしいこわい人だとおもつて、口をきく事も出來なく成升た。實はその前人のゐない時、そつ

と母を動かして見ても、なんだか變な樣子ですから、悲しうムり升たが、そうなつて、別に泣事も出來ず、たゞ父に何かいはれまい、口をきくまいと、乳母の傍に斗居升た。母はそれから箱へ入、寺へ行ましたが、乳母が居ますから、どうやらかうやう淋しくもなく其年もくらし、翌年の四月頃御客樣が大勢あつて、父の所へ嫁が參り升た。今度のおつかさんだよと、父にいはれた時は、しみ〴〵悲しく、なんだか、そこで泣ては惡からうと、戸棚へは入つて、しく〳〵泣て居升たが、乳母も混雜にまぎれて、なぐさめてくれませんで、こんな悲しい事はありませんでした。私しは母のゐる頃から、だれをしへるとなく、父はうそで、先の父が今居ればたいしたものになつてゐるだらう、といふ事は、聞て居升た。その上、母が申した事が、始終心にあつて、何をされるかしれないと、油斷をしませんから、何となく間柄も變になり、母は猶更、父も言葉をかけてくれません。私しも望みませんから、乳母の傍に斗ゐて、毎日學校へ通つて居升た。私しの十三の時、乳母は子がなくなつたと申して、房州へ歸りましたから、私しは實に悲しくつて〳〵、毎日〳〵泣くらし升た。この時分は、宅も追々繁昌して、店の者も三人斗居て、下女も居升た。今の母に男と女の子が年子に出來まして、子守の私しに二ッ斗上のがあつて、私しと中よしで、よくお煙草盆などに、元結屑を紙屑の中からひろい出して、結てくれました。この頃からは、三度の食も、下女などと共に、臺所で食べ、居るのも起るも、下女と一所で、雜巾を掛けたり、掃いたり、色々働らかせられました。私しも下女同樣に、父とも母ともあまり呼ませんで、働らひて居升たが、朝晩に、亡母と乳母の事をおもひ出さない事はありません。實に今の兩親の無慈悲を恨んでいましたから、時々愚痴をこぼして、泣事もあります。朋輩も同樣の下女は、慰てくれながら、實に旦那は利口な人だ、昔は毛唐人きらいで、掃部樣のやうに毛唐人好な人を、黨を組んで殺したといふ事だが、今はこんなに立派になつて、實にゑらひ人だ。でも御美代さん、おつかさんを御神さんにするには、色々な魄膽があつたといふ事つた。それをおみよさんのおつかさんがしつて、苦にやんでしんだんだそうだ。だから、病症もしれないで、二年もの長病だつたと、だれに聞てか、時々に咄すを聞さしまして實にかなしく、母の死亡つたのも、父のせいかなどゝ

思ひ升と、なんでムり升たか、父が敵の樣におそろしく、にくらしく、私しも何をされるかしれないと、この事はちつとも忘れませんでした。母も乳母の居た時は、猶更、居らなくなつても、衣服一つ縫てもこしらへてもくれず、娘の私しを下女達よりひどひ姿をさせて、下女よりも使ひ立ますを、實に堪らへて居ました事は、どんなでムりましたらう。すると、ある日、乳母が尋ねて參りまして、掛り子に死なれ、其嫁を又外へ遣り、孫は手元へおき、それこれして、遂に手紙斗の音信で、二年越も御目に懸りませんでしたが、實は上總の豪家の息子に、年若な養女が欲しいといふ事を聞ましたから、そこへいつて咄しをした所、是非、濱の人なら物事も出來やうから、相談がしたいとの事、お十八にもおなりなさつたら婚姻て、身代もゆづるとの咄し、如何のお思召かと、常には宅におつた頃から、あまり口もきかぬ母へ、しきりにイソイソと咄しをして、私しの今の有樣も手紙でしつて居るものでムり升から、進め升。母も父も、異義なく厄介拂の積りで、仕度は先方が金持との事故、かへつてはぢをかくやうなものだから、何一つこしらへてはやられないけれど、と申しましたを、聞て、乳母も私しも思はず、歯ぎしりをして、泣ました。來月は乳母が迎に參ると申て歸りましたから、しらぬ家へ行のは、はづかしく思ひましたが、まさか、こゝよりこわい、おそろしい家はあるまいと存じて、來月を待遠におもつておるうち、房州から郵便が參りまして、大病だからきてくれとの事、母も父も年寄の事、しぬまいものでもない、舟にのつて早く行つてやれと、一圓渡しましたのをうけ取て、なんだか逭立られるやうな心持がして、其朝出立して、着替一ッもたず、一昨年の事でムり升したが、たつた一人て、房州へ參りました。十五でムりましたが、ちつともこわいとは思ひませんでした。かたきの宅にゐるやうな心持より、よつぽど氣樂な旅でムり升た。乳母の家は、茅葺で、餘程きたなうムり升したが、乳母の寐てゐる所をみるやいなや、かけ上り升た。乳母もチヤと申して、這ひ出しました。枕邊に十八九の色白な男が居て、孫の正太郎だと挨拶を致しました。名はよく聞ていましたから、久しひ知人の心持がして、共に看病をしましたが、二時間立ぬまに、何かいひたさうに、幾度も口を動かしましたが、私しど正太郎の手をしつかり握り、其儘目を眠りました。實に杖とも

柱ともたのむ人の事故、手足をもがれたやうに存じましたが正太郎にはげまされ、それ〳〵とり置きもしまひました。乳母が居ませんから、嫁の口もそれありにわからず、七日も立ましたが、濱から何とも申して參りませんし私しもかへる氣はムいませんから、他へ今片付てゐる正太郎の母など相談をして、私しを正太郎の嫁にもらふ事に、濱へ掛合の人を出しました。早速咄しも纒り、四五年二人共稼ぐ積りで、正太郎はある東京の官員樣へ書生には入り、身をたてゝのちに東京で家を持たうとの相談で、二人で出て參りまして、私しは此方へ直に御奉公申上げ、正太郎は立派な官員樣の所へ上り、大層御前樣の御氣にかなひ、勉强もさせていたゞきましたが、………先達てコレラで………、ハイ濱の家は、今でも繁昌致して居升けれど。

兒籃

○納豆屋の話

小島きよ子

アラ………此の納豆屋さんはお爺さんの癖に樫實を拾つてますよ。ウソ………樫實じやなくつて………椎の實………!。ナニ此の納豆屋さんは、椎の實の癖に、お爺さんを拾つてるッテ?。アラ…ソウ言つたんじやないわ………此の椎の實は納豆屋さんの癖にお爺さんを拾つてるッテ言つたノ!。アラ又たあんなこと言つて可笑こと…椎の實がお爺さんを拾つてなんテ………と五六歲より七八歲位の小兒が、ガヤ〳〵と六十路餘りの納豆屋を取り廻いて騷いで居ましたのは、牛込見付内の土堤に向つた或屋敷の垣根の外方でした。其の中一人の女の兒……短い髮の毛を三つに組んで、後ろに下げたと申すよりは、いつそピントはねて居りましたのが、其のお爺さんの側にツカ〳〵と步み寄りて、可愛らしく……「お爺さん…それを拾つて何んにする」ノ?と問ひかけました。すると其のお爺さんはしわがれた聲をやう〳〵咳と一所に………「お孃ちやん…爺は此れを食べるのです………御飯のたしに………と哀れにも答へました。以前の小兒は不審そうに「なぜ、籃の中の納豆の豆を食ないノ?」と問ひ返しました。納豆屋は何んと答へましたろふカ………。それを食べて仕舞と明日から商賣が出來なくなるからと申しました。小兒は漸く分つたと云ふ樣な顏をして、少頃らく考へて居りましたが、俄かに地につく

斗りに長く垂れたる袂より、一枚のお煎餅を取り出して……「お爺さんに上げましやう」と可愛手にて出しました。お爺さんは驚きつゝも喜んで涙を流して居りました。すると今まで側に默ッて見て居つた以前の男の兒も、女の兒も………「僕も遣ろふ」………「私も上げやう」………と一同が椎の實拾ひの御手傳にかゝりました。

皆さん如何で御坐いますか、此の一人の小兒は、實に善事をいたしました、慈善と申すことを。そして外の小兒達も、此の慈善の眞似いたしましたから、矢張善き小兒達で御坐います。けれども、前の一人は善事の種子を蒔きましたから、一番善い小兒で此の中での人物と思はれます。善事をする小兒は、神と人とに可愛がられて、段々立派な人になります。立派な人とは、世の中を益し神樣の御榮を顯はす、清き高き潔ぎよき人のことで、此の樣な人は自分が福な斗りでなく、何時でも人を福にしますから、神樣の愛兒と云はるゝことが出來ます。實に難有ことではありませんか。だから皆さんも出來る丈け善事をして立派な人に成つて下さい、此れは過る木曜の朝、私が學校に參りがけに、ほんとうに見た事で御坐います。「矜恤あるものは福なり其人は矜恤を得べければなり」とは、神樣の御言葉で御坐います。

理學

○風船の話

吉田伸子

スペンサー氏の風船のり珍らしくも又面白しとて、評判たゞならず。好き折ゆへ、その風船の事をお話しします。

雲の天に浮び、煙の空に上るは、雲と煙が空氣より輕ければなり。風船の高く騰るも、亦之れと同じ理なり。抑そも風船の構造は未だ完全なるとを得ずして、今日實地に應用さるゝこと、極て稀なれども、自今幾多の改進をなさば、多年の後、滊車滊船の今日に於ける如く、交通運輸の最要具たるの日ある、亦知るべからず。

此未來の空中旅行機の發明者は、ステフン、モンゴルフェー、及びジヨセフ、モンゴルフェーてふ兄弟にて、發明の初に、紙にて裏附たる布の球直徑四丈ばかりなるを造り、内に熱したる空氣と煙とを入れ、尚ほ其熱をなるたけ永く保たせんが爲め、球の下部に酒精を注ぎたる海綿に火を點したるものを吊し、置けり。初めて世界に現はれたる風船は、實に如斯も

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のにてありき。而して、此球は、地上より一英里以上の所に達し、其所にて熱を失ひ、直に地上に下り來れり。此の試驗の行れしは、今を距る百餘年前、乃ち西暦千七百八十三年のことにてあり。

翌八月、ロバートの兄弟と云もの、印度護謨を塗りたる絹にて大きやかなる球を造り、之れに水素瓦斯を盛りぬ。此瓦斯は萬物中最も輕きものあれば、其氣球の地を離るゝや、非常の速力を以て上騰し、四分間にて殆ど三千尺以上に達し、雲に入て其影を隱せしが暫らくして、其上騰の地パリーを距ること十五英里の地に落下せり。

現今普通の風船は之れに盛るに、石炭瓦斯（通常單に「ガス」と唱へ、街頭又は室内を照し、若くは燃して物を熱するに用ゆるものにて、種々の炭素と水素との化合物の混合せるものなり）を用ゆ、此物は水素よりは重けれども、容易く、且つ廉價を以て得らるゝを以て、水素に代用するなり。而して球は、漆の類を塗りて空氣の入り通はぬ絹を用ゐ、其上に網を覆ひ、一ッには氣球の强さを增し、一ッには下に籠を結ぶの便となす。此籠は即ち球に乘り天に上らんとする人の、坐する所なり。而して上騰を試むる前には砂を盛りたる數多の小袋を籠に乘するを常とす。之れ上騰の速力減ずるか、又は毫も上騰の氣味なきときに、其砂を放出して、氣球を輕るくし以て速力を增さんが爲め、又は更に一層の高所に至らんが爲めあり。斯て思ふ程に登り極て氣球を下さんと欲せば、球の頂の小き孔、常には發條にて、閉塞するものを開き、瓦斯を漏すときは、氣球の重さ增加して降るべし。

氣球に在て、己の位地の高低を知るには、氣壓計に依るを便とす、之れ高所は空氣の壓力弱くして、氣壓計の水銀柱、其高を減ずること甚しく、低所は空氣の壓力强く、隨て水銀柱其高を減ずると少なきか故、水銀柱の高低に依て、推算するときは、稍精密に其位地の地上を離るゝ何千尺あるやを知り得べければなり。

笑ひ草

紅葉は存外花より紅　　ふみ子

妾が知れる或る理學士此比或る集會の席にていへるとあり。凡そ世の中の文明に進むといふ事は、理學が追々、開けて來

るといふ事にて、理學が開ければ人々は、自分の手足を勞せずして、總ての意思を達し得べし。例へば、昔は膝と膝とを突合はさなければ、談話の出來なかつたのに、今は傳話機といふものありて、幾數里を隔つる所の人にても、居ながら談話が出來るといふ樣になり、又船を遣るにも、車を動かすにも、すべて人の力を勞せずに事が足りる樣になりたるは、是皆理學の効にして、文明の德澤ならずや、左れば此調子にて、世の中が進みもてゆかば、終には、ものいはずして、人に意思を通じ、食はずして腹をふくらす術の出來まじともいへじ、予は文明の進歩と共に、人間が何事も理學にのみ依賴して、無性になるには、驚けりと。此時妾の傍に居たる或る翁は實にもと思ふ面持にていひ出けるよう、夫れにて私しは分りたり、此頃私の隣家に、女學生を嫁に貰ひたるに、其嫁は、何でも今時の、文明敎育とかいふものを受けたる人とやらいふ事にて、流石は、餘り手足を遣はず、例へば毎日の菜でも、日々之れを煮るは、面倒ありとて、絕へず蒲鉾を買て置き、食事毎に之れを小口切にして、ムシヤリ〳〵と嚙み、又衣物などが綻びても、來年はどうせ、ほどくものなればとて、辛抱強くも、其儘に着用し居れり、私しは其家の姑婆さんと共に、散々嫁の無性を譏つて居たが、扨はそういふ理屈のあつたものか、夫れでは早く其事を隣家の婆さんに斷して、喜ばして遣り升ようと、翁は獨とりうなづきていそ〳〵と出で行きぬ。

夫れに就て思ひ出たるは、是は夫れにも彌勝りし、一層無性なる男のはなし。若し此男を、彼の理學士の說を假りて評せば、天晴れ今より幾世紀後の文明人士たるの資格を具へ居れりともいふ可きか。此男、何處に住み名は何といふにや、人の問ふも、例の無性なれば、うるさしとて答へたるとなければ、何人も知る者なし。一日彼は、能く〳〵の用事ありしものと見へ、辨當を腰にして、五六里許ある村里へとて、出行きぬ。腹の虫は、此男の心を知るや知らずや、情けなくも途中にて、頻りに空々と鳴り響きて、辨當の開函を促しぬ。彼は自から腰より取りて食ふを面倒となし、誰かに開けさせて喰せて貰はふと思ひ、空腹さを忍びて、歩み行く。折好くも一人の旅人に邂逅しぬ、と見れば其人は、大いなる口を開きながら、此方に歩み來る樣なり。扨は天の與へ、彼旅人も空腹さを忍びて歩行くにやあらむ、されど辨當を持合すまじ、誰か喰せて呉れる人はなきかと、口を開けつゝ行ならむ、且

しく／＼夫あれば丁度幸の事なり、彼には腰なる辨當を外させて、其半を頒ち與へ、次手に我も喰せて貰はばやと心玆に一決し、兼ての無性には似氣なく、呼止めて、其趣を語りしに、定めて彼は喜ぶならむ、勢よく我腰を探り呉るゝあらむと思の外、彼旅人は至て不興氣ある顔して、

「さて／＼世には厚皮しき人もあるものかな、人に辨當を喰はせて遣る暇がある位ならば、斯く顋のたゆき目をして、途の二三里も歩行きはせじ、我は、前の宿より菅笠の紐が寛みて、脱げかゝる樣に思へども、夫れを結び直すとの、めんどうさに、顋を延して漸くに爰迄歩み來しものを。

といひ捨て見返りもせず行過ぎけるとあり。是等をや眞の文明人士とはいふならむ。

批評

撫象子

格朗空

民友社が曩に、ブライトの傳を出版し、引つゞき、コブデンの傳を出版し、更に横井小楠の傳を出版し、今亦た竹越與三郎氏の筆によりて、大豪傑クロムエルの傳を出版するに至りたるは、何如にも喜ばしき限りなり。クロムエルを能く寫したるものは蓋しカーライルに越るものなし、而してカーライルの文を能く讀みて巧に其の要點を發揮したるもの、今ま此の「格朗空」となす。新日本の文學界に於て、偉人の傳記出版せられたるもの少なしとせず、然れども未だ嘗てクロムエルを廣く紹介したるものあらす、亦此書の如く能く之を寫したるものは未だあらず、吾人は日本青年の爲めに切に此書を得たるとを祝賀す。吾人は一々、細かに之を評せず、讀者にたゞ之を一讀せよと勸む。特に眞誠の改革は上帝に從うものにあらずんば爲しがたきとを知り、天國の上に礎を置かざるの社會改良は朝の露よりも尚墓なきとを知り、猛烈なる愛國心と、敬虔なる信仰との只だ能く今日日本帝國を救ひ得べきとを確信するものは、須らく此の書を一讀すべしと奨む。

クロムエル中ごろ鐵騎と適はず、神代復古黨、十一月の觀兵式に於て異情を示す。彼れ一鞭疾走して來り、大喝、打つて一人を殺し、首領十一人を執へ、

誤られたる人よ、汝は吾人が天命によりて上帝のためあり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と信じたる此事業を破らんとするか、行け、悔改めよ、と云ふや、兩隊の兵士、涙に堪へざりき。又彼の死するや、鐵騎、靜かに劍戟を棄てゝ故郷に歸れり、或る者は農夫となり、或る者は工夫となり、或者はパンを賣り、或る者は商人となれりと云ふ。吾人讀んで此に至り落涙千行、聖雄にあらずんば決して武力を善用すると能はじと覺る。

クロムエルが、ダンバルの戰ひに克つや、馬を立てゝ詩篇百十七章を誦す、云く、もろ／＼の國よ、汝等エホバを讚まつれ、もろ／＼の民よ、汝等エホバを稱へまつれ。一千六百五十八年九月三日、夜大風を起し、巨木倒れ、人家壞る、クロムエル將に永眠せんとして、傍人に謂ッて云く、無益なる此浮世を愛する勿れ、余は汝等に告ぐ、此世を愛するは好き事にあらずと。又云く、主は知り給はん吾れ若し生きんとを願はゞ、そは汝の榮光を現はさんためなるをと。人此に至らずんば、安くんぞ能く同胞の爲に命ちを捐つるとを得ん。

此等の事、クロムエル傳記中極めて普通に知られたる所ろ也然れど吾人は殊更ら、今ま之を繰り反し、喜んで讀者が眞豪傑に近づくの誘引を爲すと云ふ。

○紅鹿子　紅葉山人著

次に此書を評せんとて讀はじめぬ、何となく讀心地あしゝ。くはしく次號に於て評せんとを欲す。

(102)　繪入日本家事要法　（中本一冊二百九十頁　名古屋本町通靜觀堂）

伊東洋二郎氏の著なり。何くれとなく面白く書きたり。折々實際めきたる例を揭げ、一きは面白くしたり。一風かはりたる家政本と云ふべし。前年世に出しものなれど、今また再版となりけるよし。

○手風琴獨習之友

四竈訥治氏の著作、アッコーデオンの獨習に宜し。

正誤

本誌第二百三十六號紙上日本繪歷史の概畧第一の中金閣寺の金は銀の誤り仝二百三十八號第三の中「元來古法眼と云ふは畫工に任せられて」云々は衍なりしよし末松氏より申越されしに付訂正す。

此近處に赤表紙で女の雜誌を出版する家がありますか御存じなれば敎へて下さい…さよう町所と番地と社の名前さへ分りませば敎へ申しましようが何と云ふ所で社の名は何と申すノデスカ丁度私も尋れて居る所デス

有名な畫工が六本の指をもつて居る天の使の繪を畫ひたる時ある人が天の使が何ぼ何でも六本の指をもつてゐるとはひどひあの畫師はウソを吐く奴だと云ふ畫師はそう云ふ人こそ虚言を云ふ五本あるか六本あるか見たこともない僻に。

文學

月

池袋清風大人批

〽松ほみやのうへに出てたる月みれは（影に）（雲ゐの庭やさやけかるらん）
くものたえまにすみわたりけり。　日高みつ子

評　大宮の上といはゝこれにかゝりあひある事をいふべきなり雲の絶間に澄む事は大宮の上でなくとも……直しにて一變せり。

〽白雲にとふかりかねのかつ見えて（つらなる）（す）
晝にもまかふ秋の夜のつき。（かさ）　山口つる子

〽夕されば山の端よりそ出にけり（名もしらぬ）（る）
我ふる里の秋の夜のつき。　星野ゆう子

〽水鳥の立ゆくかけも見ゆる哉
伏見の澤の秋の夜のつき。　みさを

〽なかめやる雪井の月はかはらねど（久かたの）（昔に）
世のありさまはうつりはてにき。　江間くめ子

鶉

〽山城のよとの堤をこへくれは
朝霧かくれ鶉なくなり。　前島むつ子

野徑渡

〽野路狹みゆくて見えねど白鷺の（たさり行末野の原に）
落るわたりや渡あるらん。（立し）　尾崎　某

評　上句言葉つかひ拙にして下句趣向あり故に斧正せば直に好詠となる

さしわたり今の女文の鑑と爲すべきは、白石、鳩巣などの文章なるべし。白石のは折たく柴、鳩巣のは駿台雜話を宜しとす。今ま駿台雜話の中より、左の一節をぬく、

○朝がほの花一時　室鳩巣

松永某とて鈴木氏が道學の友ありけり、其人朝がほの歌とてかたりしが、自からよめる歌にや、又は鈴木某がよめるにや、とかく兩人の内にてあるべし

朝がほの花一ときも千とせふる
松にかはらぬこゝろともがな

此歌意味ふかきやうにおぼへ侍る。昔より、あさがほをよめる歌おほけれども、大かた朝がほの空なる事をいひて秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらすを趣向とする外は見へず白居易が「松樹千年終是朽、槿花一日自爲ㇾ榮」と云ふ詩を、公任の朗詠にも取て風雅とすれども、是もしひて榮枯を一つにし、彭殤を齊うする意にて、俗耳には高きやうに聞ゆれどもいと淺き事におもわりける（徒らに世を墓なむの言葉は兎角高倘げに聞ゆるもの也、眞理を求めざる人の懷疑論は泡沫の味はひなきが如し）、是等は瞿曇が涎を引き、莊周が唾を

あむるに過べからず。今ま松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし。各いかゞ思ひ玉へる。翁は朝に道を聞て夕に死するも可なりといへる意とこそ思ひ侍れ、朝に咲て日かげを待てきゆるは、朝がほの天より受けたる性なり、世には千年を經る松さへあるに、是程はかなき生を得て、いさゝか己れを忘れ、外を羨やむ心なく、朝な〳〵いと快く見事に咲て受得たる性分をつくして枯るゝこそ、花の見する誠なれ。いかにあだには見るべき。それは松も同じ事なれど、あさがほのはかなきこと、一入そのことわり、しるく見へ侍る。されば松の心に千とせなく、あさがほの心に一日なし、たゞ各己が性分を盡すばかりなり。（人間茲に至り始めて平等の安心を得、平民主義なるものゝ眞髓は實は此の覺悟に達することあり）。然るは松の千とせを榮と見るも、あさがほの一日を墓なしと見るも、たゞ見る人のよそめあり、松と朝顏の心になにかわらん。およそ無情の物はかくのごとし、人は有情なる故に、万物の靈といへど反つて私智に妨げられていまだ道をきかざるときは、こゝに至るとを得ず。されば、人は道をきくべき事なり。

隨感

生意氣論

中島とし子

余は女學校の二三をしる　このしる二三女學校中　女學生をしる少くなからず　この少くなからざる女學生中賞擧すべきものゝ多くあるをしる。素よりこの二三女學校の女學生を以て他の多くを代表するには非れどこのほむべき女學生に對する毎に如何なれば當時一般に女學生が非難を蒙る事ぞと余は疑がひと殘念とに堪へざるあり。而してこの非難は大抵生意氣なりとの總括したる一語最も勢力を占むるものゝ如し。然れども名珠瓦礫共に同一樣の評語を蒙らすは甚迷惑の至りならずや。元來如何なるものが生意氣にして如何なるものが否らざるかの區別劃然たらざるべからず、これが區別をして明らかならしめずば、少年の女學生其方針に迷ふなるべし。女學生が緣日店の猿が果實に對しての如お辭儀せざるを以て生意氣なりと爲すか。蟬の如く蝶の如き雲鬢影を絕て無雜作なる束髮を以て生意氣ありと爲すか、人の物問ふとき答の濁らざるを以て生意氣ありと爲すか。疑はしき事あれば問ふに

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

躊躇せざるを以て生意氣なりと爲すか。會合等に無遠慮に出掛るを以て生意氣と爲すか。友人同志の相訪問する屢々なるを以て生意氣なりと爲すか。漢語英語交りに談話するを以て生意氣なりと爲すか。女權擴張說を唱ふを以て生意氣と爲すか。即ち是等の文を綴るものもまた以て生意氣なりと爲すか。生意氣なりと爲る眼よりこれを觀るときは、一つとしても生意氣ならざるなきはなし、また生意氣ならずと爲すの眼よりこれを觀るときは一も生意氣なるのところなかるべし。元來生氣ありといふとは非難せし言葉ならで譽し言葉なり、御身は死物の如しといへば誰も心地惡しかるべし、これに反して御身は活物なり生氣ありといへば誰も心地惡からざるべし、唯僅かに意の一字を加へてこれをなまいきと讀むときは譽し言葉に聞こへぬこそ不思議なれ。磨て將に珠玉ならんとするの女學生多きにもかゝはらず、概してなまいきの酷評を蒙り玉ふのなまいきならざるの女學生のためには泣てこれが寃を訴へたき程なり。されどこれらの評はます／＼女學生をして善きの道に誘かんとするものなれば、この評に激して無作法なる擧動言語兩ながらなからん事を期せざるべからず。書物讀めざるに讀めるが如きの樣を作り、世の時事分らざるに分り切つたるが如き風を爲し、聞囓りたる議論を受賣りして吾が物の如く議論振り、何かの會企てあればその會の是非を判定するの識なくまた加盟すべきや如何をも勘考するの遑なく輙すくこれに雷同し、おのれ學窓にありて文字を解するとて無學のものを嘲弄する如き、おのれ聊か時世分りしとて分らざるものを輕侮し、おのれ都會の輕薄なるの風習に染みしとて質朴なる父兄鄉黨を笑ふが如きの類は所謂生意氣なるものならん。されども物讀むべきの場合にありてよみ能ふを以てよみ、時事を談ずるの塲合にいたり自ら知る部分に於て談じ得るを以て談じ、自己の考ありこの考を論述するの塲合にいたり論述し得るを以て論述し、其他何にてもおのれなるもの具はつて、物の是非明か是非明かなるに依て、進退誤たざるの類は即ち生氣あるものにして、世人の說くところの生意氣なるものと相隔るや遠し。世人がそれらの區別立るなく無雜作に生意氣の評を下すは驚かざるを得ざるなり。余强ち今日の女學生が都て生意氣の臭味なしといふに非ず、然れどもまた生意氣ならざる即ち生氣あるの女學生少なからざるを信ず。唯この評をして勢力あるを得せしめば女學今より退歩するなきを得んか。是に於て思ふ今日なまいきならずしてなま

いきなりとの寃罪を蒙るの女學生更に愼しみに謹しみを加へ、內部の進步と共に外部の如何に意を用ふる仔細ならざるを得ず。如何となれば生意氣と評するの世人は先第一着眼を外見に注げばなり。

問答

ふみ子

問　子を持ないで親の恩を知るは何れの時でわり升うか。

答　隨分困難なお尋ねですから種々にいふ人もわり升うが、私は今自分の信ずる處だけを斷定して、お答へ申し升う、凡そ男子にありても、女子にありても、恐らく他と結婚したる時が最も親の恩特に母親の慈愛を感ずるとの轉た切なる時であらふと存じ升、何故なれば配偶者は、最も自分と親しいものです、又自分を愛すべきものであり升、けれ共其配偶者ですら愛の度は、なか〳〵母の愛と、競べものにはなり升せぬ、母は何事も子の爲には忍び、又宥して呉れ升、けれ共なかなか配偶者はそうは參り升ぬ、そして又母の愛は誠に淸く潔く決して報酬を求め升ぬ、けれ共配偶者の愛は解剖して見升れば、自分が愛せらるゝが故に他を愛し、又已れの方へ愛の報酬を得んとて愛して呉れるに外ならぬのです、どうして〳〵母親のとく己れを忘れて、犧牲となり呉るゝのではあり升ぬ、ダカラ兎角氣まづい事があり、爲に結婚の當坐は特に親の慈愛を思ひ起して其恩を感ずるとが轉た切にあるのです。以上は私の經驗に依りてお答へ申升た人は知らず私は實に斯く信じ升。

寄書

愛契巖本善治君に贈る

在西部　湯谷磋一郎

盲聾迷に睡る饑狼其前に牙むき渴獅其後に爪さく是の時に當り狂聲絶叫其危急を報して耳朶をうてさも彼尙ほ酣睡を貪て覺めす我却て將さに狼獅の牙爪の爲めに犧牲さならんさす昔者ソクラテス道を敎て毒杯に斃れ仲尼仁を說て陳蔡に困みステパノ神の子を宣て石撃せられヨハン、フース眞の信仰を唱て焚殺せらる噫何そ古來聖賢義人の艱難困厄するの甚しきや然り而して彼等從容晏如之を味ふこさ飴の如く乳の如くなるものは抑も何ぞや蓋し彼等は正義の爲めに受くる艱難困厄はヴワンダービルドの富よりも貴く王冠よりも價あるこさを信すれはなりイスラエルの歌仙嘗て歌て曰く義人患難多し然さエホバはみな其中より助け出し玉ふさ又曰く義人叫びたれはエホバ之をきゝて助け玉へりさ噫吁我願くは義人さなりて彼等に從はん噫吁我願くは義人さありて彼等に適歸せん。

兄や義人の筆をさり義人の舌を揮ふ既に年あり聞く天下の匪徒僞善者兄を怨むこさ亦甚しさ咄彼等何する者ぞ不義を爲すに勇ましき者寡婦の家を呑むに丈夫なるものにあらすや然り既に義人也故に義を惡むもの義人を怨む亦宜ならすや然りさ雖天下豈亦白旗山に隱するの木曾冠者奧州九郎なからんや兄の今日ある蓋し天未た我邦を棄てされはなり神の人イザヤ曰く正義のいさをは平和、正義の結果は永遠の平穩さやすき也さ願くは眞正のホームなして曠野に住まはしめよ永遠の平和をして山林に居らしめよ。

聞く兄更に社業を擴張改進し女性の記者を增し夫の狼獅を叱咤するさ共に世の可憐なる盲聾を指導する切益切ならんさすさ弟豈東天を望みて履齒を折るの感なきを得んや兄か旗は高し兄か城は堅し兄の劍は利し弟復た何をか望まん見よ芙蓉峰頭上の太陽將さに輝かんさす急け天國平和の女よ爾の翅を早め爾の福音を宣へよ謹祝。

女學雜誌の進步を見て

鈴木弘恭

世の中のをさなき子らをたらちねの
かしこき母は千代にさかえよ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學記者に寄す

叢菊野史

女學記者足下ハ闘々たる濁世の君子なり擧世皆名利に奔走するに足下獨り專心一意道德の爲めにす誰か感嘆せざらん抑も足下が女子の爲めに盡力するは弱を扶け屈を起こし敗を興し滅を存するの主義より出でしならん故に獨り女子の爲めに盡力するのみならずして又慈善矯風の業に從事す窮民を憐み癈疾を悲み禁酒を可とし廢娼を唱へ惡を排し善を勸むるは足下の本色にして終始倦まず眞に勤むと謂ふべし且つ足下は勉めて人の善を稱し人の美を揚げ而して人の惡を摘み人の醜を發かず是れ直きを擧げて枉れるを措くの意ならん余輩特に之を讃美す。

今日足下と同主義の記者は世間其の人に乏しからず夫の民友記者の如きは其の第一にして議論縱横、文章巧妙余輩の喙を容るべき所にあらずと雖も其の志す所は政治と文學に在らん故に道德に純なるを能はじ足下の如きは則ち然らず善く政治を評し善く文學を論ずと雖も是れ緒餘なるのみ而して足下の志す所は實に道德に在らん蓋し足下は多情多愛にして世人が罪惡に沈淪するを慨し之を救ふの天職を自信し身を犧牲とするを辭せざるならん人或は足下の文章を呼で冗長にして簡潔を欠くと云ふ然れども余輩は文章に詳かならざれば之を斷定すると能はず只だ其の文章が至誠の意に出づるは信じて疑はざる所なり要するに足下は文章に巧なる道德家なり道德ある文學者にはあらず。

凡そ熱心甚しきときは偏見に陷り易きは世人の通弊なり是れ其大家が避る勿れと言ひし所以ならん然れども余輩未だ足下の此の患あるを見ず唯だ時としては自信の厚き果斷にして他を容れざるの語氣ありフランクリンは議論に疑を存して斷定の語を用ひざるとを可とせり若し果斷にして反省せずんば世人誤て之を不遜とせん正直謙遜の人は時として不遜傲慢に類するとあり耶蘇ソクラテスの如きは其の志を知らざる者は之を不遜とせん又戒むべきなり。

世人は足下の文章を視て動もすれば足下を文人才子とす余輩は足下の事業を視て常に足下の卓識決志を欽ふ。

女學雜誌の昇榮を祝す

志氣山人

百草のかれてさびしき冬の野にきくのみ獨り咲きのこりけり
をみならが鑑にせよとますます〳〵にみがくふみこそめでたかりけれ

時事

○女相撲禁止せられんとを請願す

回行院の女相撲は何如にも見苦し、彼儘にて放置せんは女性全躰の大恥辱と云ふべし、婦人矯風會員が、其差止を請願したるは尤もの事にして、吾人は只管らに贊成す。

○廢娼論益熾んなり

府下に於ては全廢の建議者非常猛烈の勢にて盡力中なり。神奈川に於ては既に全廢したり。長野縣に於ては黴毒病院費を全削し更に廢娼建議を議せんとす。群馬縣に於て過日上毛青年聯合會あり非常の勇氣にて更に殘る所ろの遊廓を全廢せんとに盡力中。山梨縣會は議員中廢娼論者大に增加し今年は十分の見込あり。東京府會に於ても數日后に同志者再び廢娼論を呈出せんとす。

○議長、副議長

中島信行氏議長に、津田眞道氏副議長に、勅撰あらせられぬ。二氏温厚にして勇猛、平和にして果斷、改革的にして且つ保守的、一言するに能く第一回議會の面目を辱かしめざれ。

○國會議員、面上に泥を崇むる

謹啓　益御清榮奉賀候今回議會御召集の爲め遥々御出京之趣新紙にて拜承仕候偖弊屋近頃新築落成致し候に付粗茶獻上仕度御寸暇の砌御枉駕被下度右御案内申上候敬具

帝國議會……縣　新吉原角海老樓
代議士……殿　宮澤淺二郎

如此き招狀三百議員の手に落下したり。議員諸君は耳に陛下召集の御命を聞き。而かして手に如此き書狀を落掌することを得る乎。諸君速やかに唾してつき返へすべし。扨々鼠輩如此き無禮至極の處置を爲す由緣は抑そも何にぞ。彼等は堂々たる眞人間と思ひ居れり、其の營業は公衆に耻づかしからぬものと思ひ居れり、之れを以て如此き奇怪無上の事をも爲し、立憲政治、帝國議會の門出に、かゝる不面目最上の事をも仕出來しつる也。諸君よ、速やかに公娼を全廢せざる可からず。

○山まゆ染

山形縣知事長谷部辰連うじは、多年の心掛にて山まゆ染を完全に工夫し、染料の能くなじむやうの新法を發明あり、過日農商務省に知らせて試驗を請はれたるよし。北方牧民の官としては、ふさはしくも亦有がたき心掛にこそある。

○勅任官の藝者

ある勅任官の家族は、近かごろ藝者風に裝そほふことに定だめ、一家殘こらず高根銀杏に結ひ、縞縮緬の小袖を重さね、金襴の帯を結すび、琥珀の足袋を穿き、南部疊黒塗台の下駄を轉ろがすなどの趣向あり。過日菊花拜見の際に、此の姿たにて御園を逍遥せしよし。奇怪至極、上流の腐され、一と方ならず。

○自由新聞眠らんとす

坂垣伯の精神と云ひ、發行主旨の自任嚴めしくありしと云ひ、かたぐ自由新聞の紙面は必らずや嚴肅ならんと思ひ居たりき。獨りあやしむ、不思議なる文學めける記事の折々魔顏をさし出しつるに、此頃は國粹宴とか云へる不埒至極の文章を續々掲載したり。云く、第一議會の奴等が俗膽を散らすと、又云く、國粹の宴を開くと、ともに自由新聞に相應はしからぬ言分也。自由新聞には自由主義の潔白なる文學者なきか、何んぞ其言行の矛盾如此く太甚しき。

○女學校花くらべ

大坂の「つぼみ」と云へる雜誌に、關西の女學校を花に比らべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て云へらく、

京都同志社女學校　桃　松山女學校　藤
大阪梅花女學校　梅　鳥取英和女學校　萩
神戸英和女學校　櫻　熊本女學校　李
山陽英和女學校　菊

○賤業者横行

又た前年の憲法發布式當日の如く、怪しからぬ者ども、國會祭の大道に横行しては千古の遺憾なりとて、婦人矯風會婦人白標倶樂部の兩會員は、各新聞社に忠告して豫防的筆誅を促がしたり。

○鷄と兎

鷄の流行ほとんど廢り、兎大ひに流行せんとす。

○きちがひ風

吾人は日本人を以て熱心執着の氣風あるものと爲さず、故に福澤翁の如く之に向つて凝る勿れとは云はず、寧しろ大ひに凝結せよと勸告するもの也。此に奔り彼に流れて日々水草を追ふが如きは殆んど蠻民の事に類す。近來政治上にのみ狂奔する者の多きは、是れ凝性の故にあらず、凝らざるの致す處ろ。人々の本職を棄て、浮かれ廻るは、何の凝性あらんや。

新誌

さよ子

●國民新聞　は去る廿二日の紙上に於て緊急なる一法文と題し機部集なるものが前きに大同團結の車を轉じて富山縣に入り改進黨を罵り明治政府を攻擊し疾風驟雨の勢を以て遂に議員たるの月桂冠を得ながら近頃前官より一等高き官位を得たるの故を以て國會開會に先だつと一ヶ月ある今日に於て其議員の職を辭したるとの不當あるを痛論し「吾人は國會議員を辭するの後一年を經ずんば諸官職(大臣を除く)に就くを得ず」との法文を定められむとを切望す然らずんば思ひもよらぬ人物が一躍して政府の爪牙となるが如き珍事なきを保せざるなりと痛論せり。

●時事新報　は學生の注意と題し去る廿二日の紙上に於て學生に勸告して曰く學生に於る今日の要は學問と實務との間に於て一大溝渠を埋めて兩者相互に來往するの道を開き學生衆生を彼岸に濟度するの方便を講ずると專一なり而して其方法は讀書的學問の勢力を減殺して實物觀察の風を養成するにあるのみと說きたり

●中正日報　は議員召集の當日政界尤も繁するの廿五日に於て其紙上に經濟界の天氣を回顧せよと題し論じて曰く今や滿天下人民の感情は議會開設てふ四ッの文字の上に注ぎ滿天下人民の視線は日比谷練兵場外議事堂の空を射る春ならずして花を飛ばし柳を舞ひ雲蒸し烟湧くは今日政界の天地なり然れ共今の經濟界は如何さて商業界の不振停滯を述べ斯の如きものは國家經綸の道に於て其宜しきを得たるものに非ず少しく經濟界の天地を回顧せよと絕叫叫流石に一種特色の旗色を示したり。

●毎日新聞　は曰く議長書記官長の官舍を廢すべし歲費節減の第一着手として各黨の代議士は宜しく此說を爲し以て行政部の人々をして費用節減說は自他厚薄を異にするものに非るとを知らしめよと還は是去る廿五日の紙上に於る注告なり

●國會　は大同新聞と東京公論の合同して生れ變りたるものなり其誕生日即廿五日の紙上に於て發行の趣旨を示して曰く我國會の今日を以て發兌したるものは立憲政治の實行せられて政黨競爭の愈々激烈となるの際なれば公平の意見を持して政界の羅針盤となり燈明となるべき不偏不黨の新聞紙なかる可らず、且や今の新聞紙は少數なる政事家又は一二黨派の機關となりて其意見を代表し若しくは單に商業上の事を專とし或は小說稗史を揭げて專ら娛樂に供するに外ならず其各科專門の學識を備へて注意を政事家に與へ黨派の進路を指南するものに至つては實に寥々たるを覺ゆ故に國會は此二者に注目し以て廿三年十一月廿五日以後の政事上社會上の必要に應ずる新聞紙たるの功用を全うせんと欲するにありと誓言せり

通信

神奈川縣公娼全廢可決の實況

横濱　通信員

我神奈川縣會か公娼全廢可決せし事は取り敢へす電道せしか今其詳報の筆を把るへし去る十七日なりき同縣會に議員中山安次郎氏の三業取締所廢止の建議出づるや妓樓に關係ある人を除くの外は凡て同意を表し忽ち可決せらる此事の新聞紙上に出づるや縣下十一ヶ所の妓樓主人は數百の妓夫を率ひ壯士を雇ひ議場に犇々詰め掛けたり全躰中山氏は廢娼論者にあらさるも或る事情より此建議をなせしに圖らずも廢娼の端緒の如くに成りしは事運の之れを補くるものか十八日は壯等士議場の門に要して須田、中山の二氏を詰る共に廢娼存娼に私見なしさて其地を脫る十九日は議員を宿所々々に訪ふて大に論議せんさ試みたれさも皆一言の之れに及ぶなくして去る廿一日には例の壯士妓夫前日の如く掌に汗握り拳を作りて傍聽席に扣へ地方及ひ市內の靑年數十名三々伍々彼等の間に立ち雙方白眼議決何れに歸するやさ待つ時刻已に至りぬ議員一同着席するや宮田寅治氏即ち廢娼の建議を爲す存娼論者は言ふ縣治問題にあらすさ而して廢娼主娼者は辨駁す國家問題たれさも又縣治問題なりさ甲論乙駁議長起立を呼ぶに當りて二十四名に對する二十六名を以て遂に縣會は之れを議すべき權限を有すさ可決し午后より本論に移るべしさて休憩せり。

本題に論じ及びたり宮田氏の統計上の證據學理上の說明口頭泡を飛ばす迄に論じ止むや囂々さして倘早論東西に起る交互の舌戰數餘回にして二三議員の請求に因り議長は書記をして靑年會より提出せし請願書を朗讀せしむ讀み終るや今迄騷々したりし存娼論者も再び口を啓く能はす三四分間は全員默して言なきを見て議長は論旨盡きたりさなし起立を促せしに十九名に對する三十一名の大多數を以て五ヶ年后公娼全廢に可決せりア丶廿一日は實に靑年會の否廢娼論者の一大紀元日にてありしなり。

女報

●メソヂスト派の女學校新設　兵庫縣菟原郡なる關西學校にては今般神戶表に於て一の女學校を設立する計畫あり曾て米國に遊び當時學院の敎師たる勝木市太郎氏之れを擔任せらるゝよし。

●外國婦人の入學者　神田一ッ橋外の女子職業學校へ去年九月より本年八月迄に入學せし外國婦人の數は合計七名にして之れを細別すれば英國人五名佛蘭西人一名葡萄人一名なりさ而して是等の婦人は圖畫或に刺繡或は造花或は和服裁縫などを修業し居るよし。

●職業學校の卒業生　又全校にて第三學年までに卒業せしものは乙科裁縫に卅六名全編物に十五名全刺繡に九名全圖畫に六名甲科裁縫に十九名全編物に八名全刺繡に七名乙科裁縫に十六名全編物に七名全造花に九名全刺繡に十一名總計百七十四名にして內七名は地方の學校に內三名は府下の學校に內十名は全校にて職を執り居るよし。

●婦人矯風會　にては來月六日を期し芝紅葉舘にて本年の慰勞會を催さるゝさ。

●女醫の權限に關する規則　近來我國にて女子の醫學を修むる者往々增加し濟生學舍等每期一兩名の女子卒業生を出たすに至れり今度露國內務大臣は文部大臣の合議を經て女醫の權限に關する左の規則を設定し右發布のため元老院へ廻付したる由

第一　「ニコラーエフスキー」陸軍病院の附屬醫科女學校に於て卒業證書を有する婦人は開業醫規則に基き國內何の地方を問はす診療を請ふ者の招に應し醫術を施すの業務を營むの權利あるへし

第二　前上の婦人は醫術開業權を有することを標する一定の記章を佩用するを得へし其姓名は露國の醫籍に登錄せらるゝものさす

第三　女醫は婦嬰專門醫の名義を以て高等女學校、女子中學校其他敎會及諸種の女學校竝に婦嬰病院、產科院等に於て自由に醫術を施し其業務を營むことを得へし但し普通官吏の權利を付與せさるものさす

第四　女醫は地方議會の推薦に由り府縣醫務部より地方醫務區の服務竝に町村病院等に服事することを命定せらるゝを得へし

第五　凡ろ女醫は徵兵署に於ける醫師の職務を遂行することゝ又は裁判醫學上の鑑定等に與ることを准さす故に刑法に定むる裁判醫學上の鑑定のため裁判所の招喚に應し出頭すへき普通開業醫の責任は女醫に對し負擔せしめさるものさす

●及第者の出所　今度東京府廳に於て女子高等師範學校入學志願者を試驗し及第者十三人を選擧せし趣ふるが其生徒の出所は左の如し

官立高等女學校壹人　東京府高等女學校六人　成立學舍壹人　鹿兒島縣師範學校壹人　一定の修學所ふき者四人

●山口縣の女子敎育　は一般の氣運に似ず近頃殊に駸々乎たり宗敎家竝に敎育熱心家等の手に建られたる女學校等は何れも著しき進步をなしたりさ。

週報

官令　廿四日官有財產管理規則並官有地取扱規則裁可公布せらる●

宮廷　廿五日皇太后陛下上野明治美術會へ行啓せらる●廿三日皇太子殿下濱離宮へ行啓

政治　廿一日大成會員總會を開く●同日十大臣內閣へ參集して會議を開く●全日大成會議員集會所彌生俱樂部の三派委員會合打合會を開く●廿三日中村樓に全國有志大懇親會を開く●廿五日二院の代議士召集せらる●

教育　廿二日國學院開院式を擧行す●

叢報　廿一日江湖新聞發行停止●廿五日國會第一號發刊●廿四日時亡通信社營業を停止せらる●廿三日和蘭皇帝崩御せらる●廿一日朝鮮の逍客金玉均氏幽閉を解かる

統計

●東京の結婚と離縁

去十月中の數へによれば、東京中にて結婚せし者五百五十八人、離縁せし者二百廿八人あり。左れば十軒にお目出度があれば四軒に歎きあり、花嫁十八なれば、追出され四人あり、そして離縁の尤も多きは四十五十の間の婦人にて其次は三十以上四十迄の女なり、殊に太甚しきは、十月中にて五十以上の女の結婚せしはたゞ二人あれど、離縁せられしは七人あり。

●お寺と坊さんの數

天台	四七八五	時宗	五二五
眞言	一二九二八	黄檗	五七七
曹洞	一四三三四	眞宗	一九二一〇
浄土	八三〇四	日蓮	一七四八七
臨済	六五一七	融通念佛	二六七

合　六万七千四百四十七寺

よして、坊さんの數は合して五万七千七百人あるよし。內女のお住持は六百人はごあるよし。

●國會の議員

衆議院の議員は、人數三百人にて、月給は何れも年に八百圓、生れ年は、先づ天保が五十九人、文政が十八人、文久はなし、弘化が四十八人、嘉永が九十九人、安政が八十五人、万延が七人。士らひが三百人のうち百〇九人、平民が百九十一人。三府四十三縣のうちで、平民斗りの議員が出たは、埼玉、群馬、栃木、静岡、山梨、岐阜、福島なり。お士らい斗の議員が出たは、青森と鳥取と。其他は入まじり。

品名	十一月廿六日
白米小賣（一円ニ付）	
一等米	一〇一（斗升合）
二等米	一〇五
三等米	一〇六
四等米	一一四
五等米	一二一
正米（一円ニ付）	
肥前米	一五四（斗升合）
越後米	一四五
尾張米	一四九
美濃米	一三八
本石米	一五一
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二二〇（斗升合）
上州小麥	一七五
梅澤大豆	二三〇
青柳大豆	二〇五
吟小豆	一五〇
白胡麻	一三三
黒胡麻	一五三
塩（一円ニ付）	
赤穂	二、九〇（俵分厘）
大塩	二、九五
本齊	四、五〇
醬油（一円ニ付）	
最上	〇、七七（樽分厘）
極上	〇、九一
上	一、三〇
中	一、七〇
下	二、三〇
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀頭	二、四〇〇（円）
同大頭	一、八七〇
同小頭	一、五七〇
狹山稀頭	一、七二〇
同大頭	一、四〇〇

品名	十一月廿六日
水油（一樽ニ付）	
地水	八、四〇（円）
胡麻	一〇、三〇
荘油	一〇、七〇
相油	六、八〇
綿油	八、〇〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスタ	一、七〇（円）
ホーキ	一、七一
デポース	一、六八
ロシヤ	一、七〇
炭（一円ニ付）	
伊豆上物	四、六〇（俵）
同次物	五、〇〇
同下物	六、五〇
淺上	三、八〇
同次	四、三〇
新宮丸備上	二、二〇
同角備上	三、〇〇
薪（一円ニ付）	
鹿島堅木上	
同並	
雜木上	
常州松新上	
同並	
生糸（一個ニ付）	
長濱糸上物	二八〇、〇〇（円）
同駲物	二六五、〇〇
若州糸駲物	二六〇、〇〇
越前糸上	三八〇、〇〇
同中	二六五、〇〇
同下	二四五、〇〇
八王子島田劚	二八〇、〇〇
奥州玉糸折姫	一八五、〇〇
同竹綿	一六五、〇〇
同錦綿	一五五、〇〇

品名	十一月廿六日
眞綿（一個ニ付）	
飛無銘	一一〇、〇〇（円）
並無銘	一〇五、〇〇
上入金	一一五、〇〇
並入金	一一〇、〇〇
繰綿（一円ニ付）	
坂上銘大入	七八〇（貫百十目）
坂文庫	九〇〇
三州上銘大入	八〇〇
尾州文庫入	九〇〇
地綿文庫入	九〇〇
新同泰生	三、二〇〇
毛糸（百斤ニ付）	
毛系鶴判上	一〇五、〇〇（円）
同染分	一〇五、〇〇
同中細	一二〇、〇〇
同極細	一二〇、〇〇
最上スコッチ	一四五、〇〇
靴下用極上	一三五、〇〇
木綿（一円ニ付）	
三州白開玉鶴	三、一八（反）
同開綴鶴	三、四八
同古新	二、九三
同改メ	三、二五
同間銘	三、五〇
同造り	三、七五
生金巾（一反ニ付）	
三巾イ象	二六〇、〇〇（円）
同大鳥	二四二、〇〇
同青大佛	二四〇、〇〇
並巾赤鳳凰	二〇五、〇〇
同紺鳳凰	一八八、〇〇
味噌（一円ニ付）	
上赤	七、三〇〇（貫百十目）
中赤	六、五〇〇
上白	四、三〇〇

通信女學

拜啓益々御清安奉賀候國家の爲め重任に當り日夜御黽勉乍陰邦民の爲に鳴謝致居事に候陳者近年女子敎育頗かに進歩し二十三十にして初めて女學校に入る人も多く有之の勢ひ喜ばしきことと存候然るに既に一家の妻となり特に多忙多用の良人を內助せらるゝの令閨諸君は出でゝ學び給ふの暇ま固より少きの處ろ、世は息まず開化し婦人の地位著しく進歩致候に付きては、今後婦人同性の往來は彌よ自由になり女性が外に出でゝ宴會交際に周旋せらるゝことも亦彌よ頻繁と可相成歟其際賢夫人にして萬一普通一般の學識に欠くる如きこと有之時は談話應接の砌り面白からぬこと數多出來すべくと密かに掛念するものも少からず候。

弊社此等の不便に痛歎し、毎月一回通信女學講義録と云へるを出版し、學校に通はれぬ婦人は家に居て獨學する樣、當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、百人一首講義、作文、算術、動植、理化學、萬國及日本の歷史、並に地理、等を一年にて滯りなく卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則を設け講義録の文章は分り易き上に一々假名を附け、且つ繪を入れ、尙不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校にて直ちに敎授を受くるよりも一層便利多く致候、毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義録を月々送ることにて、今月新たに入學し其第一巻より順次に稽古するも宜しきことに候。

右の主旨何卒御賞玩被下弊社の精神御吹聽の程偏へに奉委賴候、凡そ賢夫人家に居て內を修むるの暇ま〳〵、當今の女學悉皆講習の上に內助の德一きわにして所謂烈夫賢妻共に國事に盡力するの美觀國中に充滿するに至らば邦家の幸福至大と存じ候敬白。

右通信女學講義録壹冊三十二錢（全國無郵税）毎月十日出版、半年前金壹圓八拾錢。一年前金三圓五拾錢。女學雜誌と併せ購讀の人には壹割を減す。

東京市麴町區
下六番丁六番地

女學雜誌社

女學生

毎月一回發兌　第七號　一冊郵税共六錢

社團欒

士氣、霜氣寒し（秋色深しの次）……天知子
女學生を戒むる文……みさを子
晃船山の晩秋……自放子
小督をよめる……金光子
墨滴點々……暗光子

論叉說

まことのふみ（後悔、女の覆面、せつなし）……あまよ

詞流麗

詩人たれ武士たれ……春風女史
十五城ハ物かは……秋野すゝき
寶山、是れ讀書……金波女史
茸狩る山の秋の夢……稻垣愛子
猫が洞の秋遊び……吉田すは子
楓が岡の大活畵……南部貞子
秋の夕……森田千子
秋の夜……小林たえ子
偶々水害を聽く……栗原優子
詩歌くさ〴〵……

古錦襴

雛衣の述懷……曲亭馬琴
月雪花……蜀山人
當蚊帳の序……十返舍一九
九仙山……近松門左

新衣裳

返魂香＝花紫の段……柵山人

到來書

女學生一、二、三、四、五號の評……川合信水
同第六號の評……同人
眞人不眞人……木內桂子

武凜談

門前の瓦、松風の氣合ひ、

交々論

本邦の四天王、男のおしろい、北胡變名、にじむ神、思ひ煩ひ

智惠囊……數件

東京市麴町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

クリスマスと新年

面白くて、讀み易くて、繪入で、廉價で、良い本といへば、今度出來た「かへる」といふ本よ、子供衆でも能く解るから、其餘の人は、誰でも解る、だから「クリスマス」や新年などの贈り物には、極々上々、早く買て贈り玉へ、何時でもかへると思ふて居る内に、「クリスマス」も新年も過ぎてしまうよ。

一冊七錢（郵稅共）　十冊以上一割引

發賣所

横濱千年町一丁目九番地　葡萄園
東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
東京京橋區築地二丁目　一二三書店

クリスマス最良の遺物用

クリスマスも既に近くなり、正月も早や遠からず、子供衆又は家内にて樂しみに讀む面白き書物を作らんとて、左の味ひ深き敎訓のおはなしを出版す。

一冊　七錢郵稅二錢
十冊　一割引
五十冊以上　二割引
百冊以上　二割半引

子供が讀みて面白く、御婦人が讀みて爲になり、哲學者が讀みて感服する趣向なり。繪は彩色にて、文章は流麗丸を轉ずるが如し。遺物には最上なり。

東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社

日本未曾有
洋服形紙

●價一枚十錢ヨリ壹組六十錢　郵稅貳錢
此形紙ハ方今歐米ニ其名博スル新法式ニ由テ裁斷ス●誰デモ容易ク洋服ヲ裁ヲ得●從前ノ分ヨリ裂地ヲ減ス●格好ハ歐米流行ノ新形●其姿畫の寫眞ヲ添フ●洋服商●仕立匠●女學校●裁縫學校等ニハ不可欠要品●詳細書望ム方ハ郵券二錢送ルヘシ

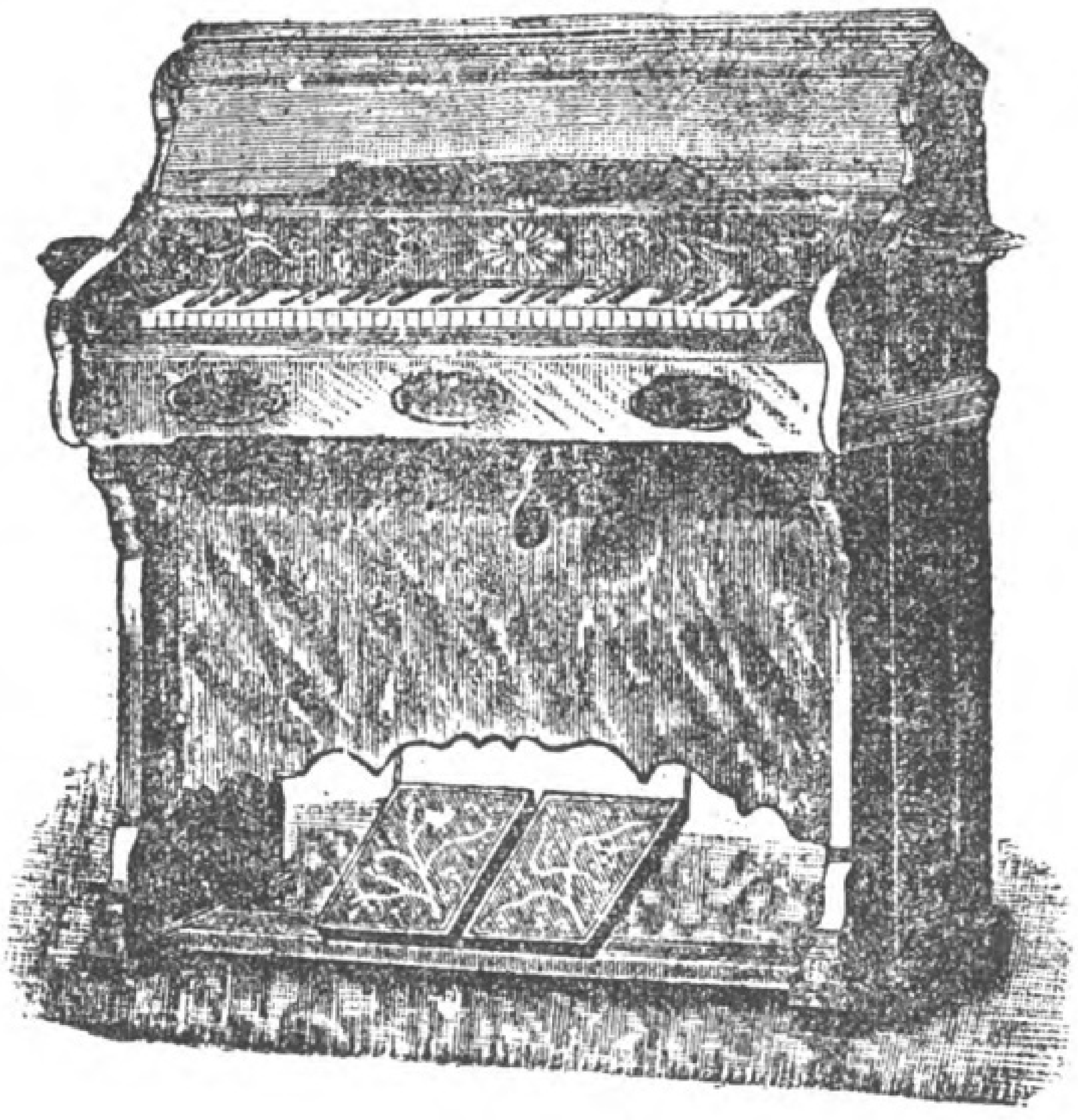
●裁斷 裂地持參ニテ裁チ斗ノ依賴ニ應ス　日曜日大祭日及夜分休業

●新法裁斷**洋服調進**ハ本館新法式裁斷ト精練ナル縫手ニヨリ調製ス他ノ裁斷法ト異處多シ其著シキハ**一切假着**ヲ要セスシテ身躰ニ適合セシム
●**羅紗**及洋服附屬品幷裁縫ニ關スル一切ノ諸機械多少ニ係ラス廉價ニテ送ルヘシ
●羅紗見本入用ノ節ハ郵券八錢投ズベシ●總テ前金
●本館新發明衛生上婦人ニ不可欠●下バキ●ノ形紙有

大坂北久太郎町三丁目
朝陽館

高木商店樂器着荷廣告

○弊店義兼テ歐米ヘ注文致置キ候ピヤノ。ヲルガン。ヴヮイヲリン。並ニ歐米諸大家ノ音樂書籍數百種今回着荷致候ニ付キ非常廉價ニテ販賣可致候間御一覽ノ上御購求被下度伏テ是祈ル。



○和製ヲルガン儀モ近頃諸機械ヲ設置キ凡テ歐米製ト異ナル無キ品ヲ製スルニ至レリ貳拾圓以上百貳拾圓迄數種
○ピヤノ。ヲルガン等深切ニ調律修繕可致候

東京市神田區通鍋町拾番地　**高木商店**

但雛形代價附御入用ノ節ハ御申越次第直ニ郵送ス

東京經濟雜誌

第五百四十八號目錄

社說
◎株券書換ニ關スル紛議
◎海關稅賦課ノ權利ハ恢復セサルベカラスト雖モ海關稅ハ重課セサルヲ要ス(第三)
◎議長ハ誰レゾ恐ラクハ是レ中島信行氏ナラン
◎米國海關稅改正ノ我カ貿易ニ於ケル影響
◎北米合衆國ノ大博覽會ヲ利用セヨ(承前)

論說
○保護貿易論(其二、自由派ノ說ハ概子周密ヲ缺ク)
○中外商業新報ノ誤謬ヲ正ス
○日本古來ノ金銀ノ相場(續)

寄書
○何爲ゾ水利ヲ活用セザル
○日本殖民論(第二)

雜錄
二宮尊德翁ノ歌二○國民自由黨足利尊氏ヲ學ブ○地租輕減○代議士ノ品位○品等博徒○海軍將校○紅葉案內○十月中外國貿易ノ景況○東京經濟學協會十一月例會○下野社交俱樂部の發會式○富山縣第一區ノ代議士定マル○秋田ノ收賄事件有罪ノ宣告ヲ受ク○酒造家酒造稅則ノ改正意見書ヲ政務調査所ニ廻送ス○十月中足利物產市場取引統計表○紐育及ビ倫敦ノ金融逼迫○外國爲換相場ノ下落○國華新聞○格期空○論理學卷之一○民法正義、商法正義(第五冊)○袖珍現行官令索引○加利福尼亞葡萄酒

銀行及商業之景況
兌換銀行券發行高
同流通高及正貨準備ノ景況
外國諸銀行ノ景況
橫濱ノ商況
東京金融ノ景況
東京公債及株券ノ商況
東京限月米及正米ノ商況
東京諸商品ノ商況

官令
(數件)

定價一冊金七錢(市外邦稅五厘增)

東京市京橋區彌左衛門町

經濟雜誌社

帝國議會の怪問題 **女人禁制** の案に關したる **坂垣伯** の意見、並に清水豐子が同件に付き「泣て姉妹に訴ふ」の沈痛なる論辨。並に、之に對する巖本善治氏が意見は、載せて女學雜誌第二百三十四號の附錄にあり。同號は附錄あるに關はらず、定價依然六錢あり。殘冊少々あり郵劵代用の注文に應ず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本評論

定價一冊六錢〇六冊前金卅三錢〇十二冊同六十四錢〇廿四冊同一圓廿錢〇市外は一冊に付郵税五厘を要す

第拾八號目次

日本評論
- 國會　帝國議會の開設 ……………… 松波資之
- 吠畝の詩人ロベルト、ボルンズ ……………… 雲井春香
- 倫理教育
- 清樂 ……………… 青軒學人
- 薩長 ……………… 三宅雄二郎
- 夕 ……………… 戸川殘花
- 小說、泣くぼさ馬鹿 ……………… 美妙齋主人
- 新政黨 新倶樂部 ……………… 久保田富次郎
- 政治上に於ける婦人の地位 ……………… 岐峰生
- 日の出る國五字の旗風を許す ……………… 學海居士

雜錄　香川景樹翁の逸事〇一種の土地國有論者

著書新聞雜誌　三上氏の日本文學士〇竹越氏の格朗空〇文壇〇吾孺布里〇東京經濟雜誌

時事　立憲自由黨評議員の臨時會〇地租五厘減〇國華新聞〇社會主義外交官〇敕奏任官雲の如し〇外交官大交迭

雜錄　改正婦女保護令〇日本の海軍〇衆議院議員の族籍及び年齡表

發行所　東京麴町區富士見町五丁目九番地　日本評論社

殊に女學生を優待し、別室を設け、尤も信切に診察すべし、尙學業中餘貲なき人の爲に自由治療す。

診察　毎日午前

外神田和泉橋通松永町廿三番地　渡邊泰

次號の女學雜誌には大附錄を添え帝國議會議員に訴ふるに學務調査の事を以てし更に他の幾多の文學を加へ直得意の諸君に無代價にて呈上すべし

福音週報

我福音週報は微弱の身を以て多難の宗敎界に生れ出で呱々の聲を發してより以來僅々數閲月に過ぎざるに江湖の愛顧過分に篤く發達の程度望外に出で今や正に宗敎界の一大勢力たらんとす依て今後社員は一層の奮勵を加へ材料を精撰し行文を平易にし**讃美歌**の欄内に於ては奧野、戸川の兩氏艶麗の文を以て優美の詩情を書き出し**社說**には植村正久氏雄健の筆を以**家庭雜錄論說**て直截活潑の思想を寫し出し**說教等**勉めて信者の生命に有益の糧を集め其他泰西の宗敎界に起れる事にして信者の尤も注意を要するを報**外信**の欄を設け電報若しくは最近に着したる新聞紙に基きて重要の事項を記載し**或**せんが爲**史談**と云ひ**或は靜思の時**といひ凡そ信者の德を建て智を研くに必要なるものは網羅して殘す所なからんとす願くは益愛讀を垂れ玉はんとを

クリスマス已に近つきぬ我社は之れが祝賀の意を表せんとて其用意夙にとりとりなりき就ては同日發行の本誌に於てはクリスマスに關する事項を成るたけ有益に成るたけ面白く記載する筈にて已に其分擔者を選定したり其躰裁に新趣向を用ひたるに至りては或は讀者を驚かしむるとあらん今敢て明言せずして諸君に其豫測を乞ひ置かんとす尙本社は特に同號を增刷して全國の各敎會に進呈するの心掛なれば廣告の御依賴者には格別の功能あるべし

福音週報定價表

	市内無郵税（前金）	郵税共
一部	二錢五厘	三錢
十三部　三ヶ月分	卅一錢五厘	卅八錢
廿六部　六ヶ月分	六十錢	七十三錢
五十二部　一ヶ年分	一圓拾四錢	一圓四十錢

發行所　東京麴町區三番町拾番地　福音週報社

眞理第拾四號　東京駿河臺鈴木町拾壹番地　世光社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の敎員孰れも熟達善良なり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

林遠里君演述

農家實益 **日本米麥改良法** 正價八錢 郵稅二錢

米作の我國に必要なるは素より論なし而して之を耕作するの方法に至りては只古來の習慣によりて以て其成熟を希圖するのみ未だ曾て之れが改良を圖る者あるを聞かざりき然るに林遠里君は夙に此點に意を注ぎ多年實地に就き研究し刻苦精勵竟に之れが改良法を案出せられ爾後之を實際に施こすに其利其効實に鮮少ならざるを以て目下此方法に倣ひて耕耘に從事する者多しと聞ぬ本書は同君が京都に於て演說せられたる者の筆記にて其方法の善良なるは同府勸業課及び大坂府農商課の是認せらるゝ所なれば尙此方法をして弘く全國に傳播せしめば實に我國の最大鴻益といふも敢て過言にあらざるなり。

●米作改良の効能

丹波天田郡にて本年の米作に林遠里翁の改良法を用ひたると殆んと五百餘人の多きに及びたるが何れも十分の好結果を得一反步に付三石以上の收獲ある見込みありとて喜あへり。(報知新聞五千三百四十三號)

發賣所 東京神田雉子町三十二番地 **團々社書店**

第一期帝國議會開設の大典擧行あるに際し聊か祝意を表する爲め本館發明各種新法傳授謝金本日より向ふ三十日間は特に半額を以て教授すべし兼て有志の各位は此機を失せず速に傳習請求有之べし

但し右半額謝金の期日は三十日間(即ち十二月廿五日限りの事)にて堅く〆切り期限後は直ちに定額謝金に復する事

本館發明各種新法傳授科目規則書入用の方は切手二錢封送あれば直ちに送呈すべし

東京神田末廣町十番地 **日本授產館**

館長 野上三省

改良各色染法及化學的醫學的應用各種發明新法敎授所

顧問員 英人 エフ、ヘンリー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

書名	定價
政教新論	全 上製二十八錢 並製二十五錢
基督教及國家	全 八錢
再版 立志之礎	全 上製三十六錢 並製三十錢
基督教防衛論	全 二十五錢
基督教及儒教本分論	全 四錢
眞理一斑	全 上製三十五錢 並製三十錢
基督教文學第一集 基督教及佛教	全 二十錢
基督教文學第二集 基督教及哲學	全 二十五錢
神之顯現	全 上製三十錢 並製二十五錢
倫理之基	全 二十錢

安息日學校必要書

書名	定價
安息日學校讀本	定價十五錢
童子聖書問答	定價十錢
聖書史記問答	定價十錢
幼年之級 幼兒之乳	定價八錢
舊約聖書之話	定價二十錢
安息日學校入門	定價三錢
安息日學校用 聖書問答	定價二錢五厘
全教ノ組地圖(パレステナ箱入)	定價九錢
教のかるた第一(箱入)	定價二十錢
初學問答	定價二錢
耶蘇教畧問答	定價三錢
安息日之守法	定價壹錢五厘
千代之礎	定價廿二錢
幼兒之友	定價三十錢

基督教新聞

吾人今日の焦眉の急務は**信仰の理**を明白にし**信仰の實**を堅固にし大に**傳道の業**を擴張するにあり此目的を以て基督教新聞は左の通りに改良す

社說 **教會振起傳道擴張**に關する實際上の奬勵及び方案

聖書講話 舊新約書中の肝腎なる部分に付て實際的にして新嶄奇拔なる講話を撰載し以て大に聖書の玩味すべきを知らしめんとす

信仰の糧 短篇明快なる信仰上の勸話を揭く(此欄は次號より始む)

論說、教報、外報、雜錄、家庭、寄書の諸欄内何れも大に面目を一新せんとを期す

金森通倫氏は每號必す「信仰の糧」欄内に、亦時々社說欄內に、寄稿せらるべし

標準 每月一回の大附錄にして四個の有益なる說教を載す翌月中の安息日每に一づゝ讀むに便にす若し一ヶ年分を集むれば百九十二頁の册子となるべし

廣告料(五號文字二十字一行につき)

	一回	二回以上	五回以上
一行以上	金六錢	金五錢五厘	金五錢
十一行以上	金五錢五厘	金五錢	金四錢五厘
三十一行以上限	金五錢	金四錢五厘	金四錢

發行人 橫井時雄　編輯人 星野光多　印刷人 福永文之助

發行所 東京市京橋區出雲町壹番地 警醒社

蕓香金子翁鐵筆ノ名江湖ニ籍甚ス終ニ大命翁ヲ起シテ御璽奉刻ノ榮ヲ得セシムルニ至ル弊堂翁ヲ招聘シテ專ラ鐵筆ノ勞ニ當ラシム乃チ翁ガ刻スル所ノ印影ヲ左ニ揭ケテ瀏覽ニ供ス博雅君子光顧ヲ賜ラハ幸甚

京橋區尾張町二丁目十八番地 天賞堂

理化學的應用實効

三能色を白くするしやぼん

定價一個十錢より

○抑此しやぼんは第一身躰の色を白くし。御顔の艶を出し。第二肌のしみ又はにきびそばかすをとり。第三種々のふきでもの丶毒を消すべき大効あり。故に名づけて三能しやぼんと云ふ。常に御用ひなされ候へば色を白くすること雪をも欺く計りにして。性來色黑き肌。又は何となく色悪しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消えて艶美なる御肌になること疑なし。殊に諸傳染病の看病人などは常に之れを用ひ身躰を洗ひなば其感染を防ぐことを受合なり御試用の上眞に三能しやぼんの名に背かざるを知り賜へかし。

●みづむし●糸かせ●いんきんたむしは常に御用ひなされ候得ばしぜんになをります。尚くはしくは本能書にあり。

製造人　西條重兵衛

發賣元　東京銀坐一丁目　佐々木玄兵衛

特約販賣所

日本橋區通二小間物店　柳屋
同村松町寶丹水　岩涙長藏
同兩國廣小路五臟圓本舖　大木口哲
同瀬戸物町藥種問屋　玉置與金八
同元大坂町清婦湯本舖　高木榮兵衛
同上槇町萬金膏本舖　安川次郎
同馬喰町一丁目小町水　下尾贊平
同本石町二丁目十軒店　森谷萬次郎
同横山町一丁目洋物店　相谷商店
同同町小間物問屋　近江屋源七
同坂本町角賣藥店　德田多助
同新右衛門町賣藥店　はたや
同親父橋角芳町　堺屋試助
同通一丁目木原店席亭向　丸れこ

京橋區銀座二丁目　岸田吟香
同三丁目萬金丹本舖　⑧藥店
同南傳馬町一丁目　伊勢屋藤兵衛
同竹川町角小間物店　丸屋松五郎
同八丁堀大通小間物店　和泉屋
同元數寄屋町三丁目藥店　結城屋
同築地二丁目賣藥店　近藤宗兵衛
同入船町四丁目角烟草店　橋本均一
芝區芝口一丁目十五番地　はしや
同櫻田伏見町角小間紙店　豊田屋
同久保町交番所角　大菱堂
同佐久間町一丁目角紙店　服部
櫻川町藥舖　保生堂
同西ノ久保葺手町藥舖　山崎日進堂
同櫻田備前町毛利邸前藥舖　梅田

同芝神明鳥居内藥舖　岩本新兵衛
麻布區飯倉三丁目洋物店　宮島
同六本木町洋物小間物店　木村屋
同長坂町保玉散本舖　堀井
赤坂區一ツ木町角洋物小間物店　松下
同同町洋物小間物店　和泉屋
四ツ谷區傳馬町小間物問屋　山形屋
同十三丁目藥舖　河合治兵衛
同大通角小間物紙店　相撲屋
麴町區麴町三丁目藥舖　田部重兵衛
同同町小間物店　藤田屋
同三番町藥舖　雨宮藤吉
小石川諏訪町一等散本家　花樂堂
本鄕區眞砂町藥舖　尾澤蒼生堂
下谷池の端仲町寶丹本舖　守田
同外神田富松町寶丹支店　長尾
同天神町一丁目寶丹支店　柳澤
同車坂町櫻香油本家　堺屋重兵衛
淺草區駒形町小間物店　中島屋百助
同黑船町藥屋洗粉本家　梅素亭
同西三筋町角小間物店　龜屋淺吉
同公園淩雲閣五階目出品　岩涙
同新畑町一番地子宮玉本舖　清水
神田區柳原通宮松町寶丹支店　伴
同小川町銀杏木前藥舖　笠井資生堂
同五十稻荷前藥舖　知新堂
同同所入口角洋物店　信盛堂
同錦町一丁目小間物店　西野小平

同洽集舘内紙石鹼店　松壽堂
同表神保町二番地藥舖　救生堂
同同洋物小間物店　享榮堂
同南神保町化粧品專賣店　おきなや
同一ツ橋通町七番地　北信堂
同同八番地　橋本吉助
同淡路町二丁目藥舖　眞壁
同猿樂町一郵便取扱所　吉村
同鍋町大通藥舖　中澤條助
同同町大木町店　齋藤辰造
品川宿停車場構内洋物店　淺子
品川宿洋物小間物店　柏川
●横濱尾上町四丁目藥舖　鈴木
●同賑町一丁目賣藥店　里見亭太郎
●同伊勢崎町洋物店　小池金次郎
●同太田町四毛糸編物所　山田
●同境町洋物小間物店　近榮
●同野毛町一小間物店　吉岡
●同辨天通四丁目角　信濃屋
●北海道函舘末廣町小間物店　新田
●横須賀旭町表門前　豐平屋
●同汐入町賣藥店　山本賀平
●同大瀧町洋物店　松本源次郎
●相州大磯茶屋町　三宅藤兵衛
●同小田原町緣町諸色小間物店　油久
●靜岡紺屋町　日上部源七
●甲府肴町藥舖　村田屋七右衛門
●仙台大町四丁目　高橋藤七

右の外藥舖賣藥舖和洋小間物店に取次差出有之候に付御最寄にて御購求御試用の程願上候。

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)
十冊。	五拾八錢	郵税。五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該懷中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す

（金側）丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上げ彈向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●（銀側）丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上ゲ彈二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時さ既に御購求の後に在るさに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限さす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價さす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりさも同種にして新規なる者さ交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戾を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製（金側）十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●（銀側）同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●（金着側）同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製（金側）十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニッケル卷上げ彈向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ケ月七曜及日指し付價三百五十圓●（銀側）廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上ケ彈向ヒ爪左アンクル總石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニッケル卷上ケ彈向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計（金側）十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品　鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環　金黃製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品　腕輪胸飾ヒン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なるこさその構造の精緻なるこさその裝飾の美麗なるこさ何れも世間の好評に違はざる良品なり尙且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりさ云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の精良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個每に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却さも購客の望に任ずるさ云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個每に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂（京橋區尾張町二丁目十八番地）ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戾スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中に就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個每に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還とも凡べて其の望み通りに任かすさ云へは、購買者に取ては至極便利なりさ云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド橫濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該懷中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す

（金側）丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニツケル卷上げ撥向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●（銀側）丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械プラチナ減金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニツケル卷上ゲ撥二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限とす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を返却すべし

● 保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製

（金側）十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●（銀側）同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●（金着側）同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製

（金側）十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニツケル卷上げ撥向ひ爪左アンクル二番ヶ惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●（銀側）廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニツケル卷上ヶ撥向ヒ爪左アンクル總石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニツケル卷上ヶ撥向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓

貴婦人持時計

（金側）十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品

鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環

黃金製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品

腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なることその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はざる良品なり尙且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりと云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個每に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却とも購客の望に任ずると云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個每に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂（京橋區尾張町二丁目十八番地）ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個每に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還とも凡べて其の望み通りに任かすと云へは、購買者に取ては至極便利なりと云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

WASON
HQ
1104
J74+

Dec. 1890
No. 242

女學雜誌

明治二十三年十二月六日發行
第二百四十二號
一冊六錢。毎土曜日發兌

本號には月一回の附錄女學第一冊を初めて附錄とし直得意の諸君に無代呈上す、、、、、、、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY